

新約
力千力千山



めけめけ

独りぼっちの狸

その昔、カチカチ山と呼ばれる山のふもとに、一匹のタヌキが住んでいました。

かつてはたくさんの生き物が住む、豊かな山でしたが、山の麓に人間たちが住み始めると、村人たちは山の木を切り倒しては、どこかへ運んで行ってしまいます。やがて山はやせ細り、そこで暮らしていたいろんな生き物たちは、次第に別の山へと移り住んで行ってしまった。

「ぼ、僕は、この山が好きなんだなあ」

1人残ったタヌキは、自分が生まれ育ったこの山が好きでした。タヌキのお気に入りの場所は山の麓から頂上へ向かう山道の途中にある少し開けた見晴らしのいい場所の大きな岩の上でした。そこから望む景色は、独りぼっちのタヌキの心を時には慰め、時には揺さぶり、時には慄かせ、時にはせつなくさせました。

よく晴れた日には、山の向こう、遠くの空の下に海を見る事ができました。そして秋にはあたりの山が真っ赤に紅葉し、夕焼けに世界が燃えているようでした。でも、タヌキが一番好きなのは、秋の空に輝く満月。大きな月の上で楽しそうに餅つきをしているかのようなウサギの影。

「いいな、ウサギさん、きれいなんだなあ」

この山はやせ細り、毎日お腹一杯に食べられることはありませんでしたが、それでもタヌキ一匹が暮らしていくには何も不自由はしませんでした。こうして、タヌキはカチカチ山で1人ひっそりと暮らしていました。タヌキは独りぼっちでしたが、少しも寂しくはありませんでした。なぜなら満月の夜には、月のウサギさんに会えるからです。

「ウサギさん、聞いておくれ。あのね、今日はね、山の麓でね、とてもいいことをしたんだよ」

山の神様の使い

それは昼間のこと。食べ物を探しにタヌキが山の麓まで降りたときのことです。タヌキは里の村人の畑を荒らしたりはしませんでした。人様のものを盗むのはよくないことだと、大好きなタヌキのおばあさんが言っていました。だから、タヌキは畑の周りにはいる小さな生き物や自生している木の実などを採って食べていました。

麓の村から山のほうへ上がった少し離れたところに、老夫婦が住んでいる家がありました。老夫婦はとても仲がよく、いつも二人で畑を耕していましたが、その日、タヌキが近くを通りかかったとき、おばあさんの姿が見えないことに気付きました。

タヌキは気になって、家の様子をこっそり覗いてみると、おばあさんは家の中で藁を編んでいました。よく見るとおばあさんは足を痛めたのか、思うように歩くことができないようでした。――かわいそうなんだなあ。

ふと、タヌキは昔、自分が足を怪我したときのことを思い出しました。まだ、狸の一族がみんなでカチカチ山に暮らしていた頃、大好きな狸のおばあさんは、いくつかの薬草をすりつぶして、タヌキの足に塗ってくれました。そのおかげで、翌日にはタヌキはすぐに歩けるようになったのです。

――たしか、山の反対側の斜面に生えてたんだなあ。

タヌキは山に戻ると足の痛みを和らげる薬草を摘み取り、おばあさんに届けることにしました。独りぼっちなタヌキは、人間のおばあさんが、狸の大好きなおばあさんに思えてしまい、とても放っては置けなかったのです。

――おばあさん、これを使うといいんだなあ。

タヌキはこっそり、山から採ってきた薬草を、家の軒先に置くと、おばあさんに見つからないようにその場を離れました。独りぼっちなタヌキの動きは、タヌキが思っているほど機敏ではなかったので、タヌキの後姿をおばあさんに見られていましたが、愚鈍なタヌキは、そのことに気がつきませんでした。

「あらあら、これは……」

おばあさんは軒先に置いてある薬草を見つけると、すぐに山に住むタヌキが届けてくれたのだとわかりました。おばあさんは何かタヌキにお礼がしたいと思い、おじいさんが畑仕事から帰ってくると、こう話しました。

「おじいさん、おじいさん」

「どうした、ばあさん、足の具合がよくないのかい？」

おばあさんは右足を摩っています。

「違うんです、ほら、これを見てくださいな」

おばあさんは痛めた足に塗りこんだ薬をおじいさんに見せました。

「おや、これはどうしたことかの一。こんな薬、どこで手に入れたんじゃい？」

おばあさんはニコニコしながら言いました。

「きっとカチカチ山の神様が誰かに使いを頼んで置いていってくれたんですよ」

「おー、それは、それは、何か礼をしないといけないの一」

「そーですね、今日畑から取れた野菜を山道に入るところに御地藏様のところにお供えをしてきてもらえますか？」

「おー、そーじゃ、それがいいの一」

そう言うと、おじいさんは早速、今日自分たちが食べる分の野菜の中から、とりわけおいしそうな野菜をいくつか選んで、山道の入り口にある御地藏様のところに向かいました。

白いウサギ

村人たちはカチカチ山に入るときは必ずこの道を通り、山での安全を祈願して、わずかながらの御供え物をするのが習慣でした。でも最近では山に入るものも少なくなり、御地蔵様の周りは雑草が生い茂り、すっかり村の人からは忘れられていましたが、それでもおじいさんは山に入るたびに、御地蔵様を拝んでいました。

そんなおじいさんとおばあさんに対して、山の神様がささやかな贈り物してくれたに違いない。
「ありがてー、ありがてー」

御地蔵様にお礼を言い終わると、おじいさんはふもとのほうに向かいましたが、不意にカチカチという音を聞いて後ろを振り向きました。するとそこには一匹の白いウサギが先ほど御地蔵様の前に立っていました。

「おー、あれが山の神様の御使いかぁ」

そのウサギは、まぶしいほどに真っ白に輝き、その目は宝玉のように赤く輝いていました。そして何よりおじいさんがこのウサギを山の神様の使いと思わせたのは、ウサギが首からぶら下げている首飾りのようなものでした。

「ありがたや、ありがたや」

おじいさんはウサギを山の神と思い、一心に何度も拝みました。

――なんだ、なんだ？なんか、勘違いしているぞ。

ウサギはどうしておじいさんが自分を拝んでいるのかわかりませんでした。始めてきたこの山は、どうやら自分にとって住みやすいところらしいとうれしくなりました。

「まったく、捨てる神いれば、拾う神ありだな」

このウサギ、実はとんでもないウサギだったのです。

ウサギの里

白兎が生まれ育った里は、カチカチ山から人の足で10日ほどの距離にある、かちかち山よりもずっとずっと豊かな里でした。食べるものには困っていませんでしたが、白兎は人間が畑で作った野菜が大好きでした。人間が一生懸命育てた野菜はどれも、野山で採れる草木とは比べ物にならないほど甘く、瑞々しくておいしいのでした。

白兎は、始めのうちは人間に見つからないように、こっそり隠れて、少しだけ食べていましたが、そのうちに思う存分食べて見たくなりました。ついに白兎は誘惑に負けて、昼も夜もお構いなしに手当たり次第に畑を食い荒らしはじめました。例え人間に見つかっても、白兎の足は速いし、ウサギの耳は遠くの音を聞き分けられるので、人間に捕まるようなことはありませんでした。

しかし、怒った村人は、あちこちにウサギを捕らえるための罠を仕掛けました。

頭のいいウサギは、そんな罠には引っかかりませんでした。ウサギほど早く走れず、ウサギほど賢くない里のタヌキやイノシシたちが村人たちの仕掛けた罠の犠牲になりました。

里の掟を破り、人間の畑を荒らした白兎のせいで仲間や家族を失ったほかの動物たちは、みんなで話し合い、ついに白兎を里から追い出すことに決めました。

「お前が二度とこの里で暮らせないように、追放の烙印として禁欲の念珠を与える」

里の長、年老いた猿は、そう言うと丸い小さな珠が連なった飾りのようなものをどこからか取り出すと白兎の首にかけました。念珠は、白兎の首にかける前には、余裕で兎の頭を通りましたが、白兎の首までくると、ぐいぐいと白兎の首を締め付けはじめました。白兎は、あまりの苦しさに念珠をかきむしり、必死で念珠を外そうとしました。

「無駄じゃ、それは特殊な念珠。うぬがちからでは、到底、外すことはできん」

しばらく白兎がもがき苦しんでいると、念珠は徐々に緩みだし、やがて苦しくなくなりました。

「この念珠は無理やり取るろうとすれば、うぬが首を締め上げる。再びこの里に戻ってもお前とわかるための追放の印」

「そしてうぬが他の里でも同じ悪さを働かないように、人間の作った作物に手をつければ、お前の居場所を知らせるようにカチカチと音が鳴るように術をかけておいた」

白兎は信じられないという顔をしながら他の誰かに助けを請いました。

「お願いします。これはあまりにむごすぎましょう。この里からはすぐにでも出て行きます。」

しかし、これでは生きていけません。どうか、この念珠をはずしてはもらえないでしょうか？」

「何を今更！」

白兎の声を遮るように、震えるような大きな声で誰かが怒号を上げました。

「貴様がしたこと、わかっているのか！貴様のせいで、ワシの息子は……息子たちは……」

怒りの声を上げた古狸の3匹の息子たちは、白兔の悪さに怒った村人たちが仕掛けた罠にかかり、村人たちに捕らえられてしまったのです。

「ワシの息子らがどうなったか……貴様、その赤い目で見るがいい！」

そう言って差し出した狸の手には、古狸の子供たちのしゃれこうべが握られていました。

「お前が里の掟を破り、人間の食べ物に手を出したばかりに、ワシの子供たちが人間に食われちゃったんだ！」

ですが、白兔は何も感じませんでした。

——そんなの俺のせいじゃないね。だいたいお前ら狸は間抜けでのろまなのさ！

古狸はまるで白兔の目のように、両目を真っ赤に染めながら声を震わせながら言いました。

「その念珠は我が一族に代々伝わる秘術により、我が息子のなきがらから取り出した骨と毛皮から作ったもの。この里ではどんな罪を犯した者でも、死罪、敵討ちはできないのが掟。せめてお前が、別の里でこれに懲りずに同じ過ちを犯し、我が秘術、我が息子の魂によって、その報いを受けることとなることを望むばかり！」

——ちいっ！なんて余計なことをしやがる！このうすのろが！

「なんと禍々しい瞳、なんと邪な目つきよ。うぬのような輩は、この場で突き殺すが、世のためというもの」

古狸と同じように、仲間を失った猪は、今にも白兔に飛びかかりそうでした。

「わ、わるかった、悪かったよ……長老様……私は今すぐここから出でいきます。どうか、どうか命だけは！」

——なんだい、なんだい、なんで俺様がこんな目にあわなきゃならないんだ！あんな罠に引っかかる奴が悪いんだ！

「もうよい、もうよいから、そやつを里の外れまで連れ出せ！」

里の外れまで来ると何羽ものカラスが白兔に怒号を浴びせます。

「カァ！カァ！カチカチ、カチカチ、兎の首には追放の印、カチカチ鳴ったら危ないぞ、カチカチ鳴ったら離れるよ、カァ！カァ！白い兎には近づくな、カチカチ、カチカチ、近づくな！」

こうして白兔は里を追われることになりました。白兔は行く先々で、疎まれ、嫉まれ、誰も白兔を相手にしてくれませんでした。里を追放された白兔の噂は、おしゃべりなカラスによって、すでにあちこちに広まってしまっていたのです。どうやらこのあたりの豊かな里には暮らせそう

にありませんでした。いくつもの山を越え、川を超え、人目を避けるように歩き続けるうちに、白兎はカチカチ山にたどり着いたのでした。

「こんな人気のないところで人間の作った野菜にありつけるとは、なんてオレは運がいいんだ！」

白兎の目は、さらに赤く、爛々と輝いていた。

月明かり
カチカチ山に
独りきり
思い焦がれる
いとしき君よ

今日は満月。

タヌキはわずかな食べ物で飢えを凌ぎながら、それでもちっともつらくはありませんでした。なぜなら今夜は満月の夜。愛しい人に会える日なのですから。

—おばあさん、元気になるといいんだなあ。

タヌキは昼間、薬草を届けたおばあさんのことを考えていました。タヌキが独りで暮らすようになって、もう何年もの月日が経っていました。

小鳥のさえずりや、虫たちの歌を聴くことはあっても、誰かと話をしたり、誰かのために何かをしてあげたり、逆に誰かに何かをしてもらったりするような「人とのふれあい」を長いことしていませんでした。だからタヌキは、なんだかとってもうれしい気分になっていました。たとえそれが人間であっても、タヌキはとてもいいことをしたと思っていました。

—一月のウサギさんにもなにかしてあげられることがあるといいんだなあ。

うれしかったはずのタヌキの気分は、いつの間にか急にさみしい気分が変わって行きました。

—一月のウサギさんと会いたいんだなあ、お話したいんだなあ。

「キミ！キミはそんなところで、何をしたるんだい？」

誰かがタヌキに話しかけました。

—ぼ、僕は、お月様とお話してるんだなあ。ぼ、僕は……ひとりなんだなあ。

あまりの急なことに、タヌキは驚き、声の主がどこにいるのか、わかりませんでした。

「ここだよ、キミ、ボクはここさ、キミの下だよ」

タヌキがいる大きな岩のすぐ下、声のする方向を覗いてみると、そこには爛々と赤く輝く二つの目。タヌキがこれまでに見た事がないような美しく白く輝くもの—一月の明かりに照らされて銀色に輝く、それは、それは美しい、白いウサギが立っていました。

月からの贈り物

「あー、そんなあ、君は、ウサギさん？ウサギさんなのかい？」

「キミは、おかしなことを言うね。ボクがウサギ以外に見えたとしたら、キミの目は、よっぽど悪いか、そうでなきゃ、月明かりに目が眩んでしまうほどの寂しがり屋なのかな？」

タヌキは驚きました。そして、とてもうれしくなり、泣き出しそうになりました。
——これは、きっと、お月様からの贈り物なんだなあ。いいことをしたから、僕の願いをかなえてくれたんだなあ。うれしいんだなあ。とってもうれしいんだなあ。

——もう、ひとりじゃないんだなあ

「あー、ウサギさん、そうだ、君はウサギさんなんだなあ。本当に、本当にウサギさんなんだなあ」

タヌキが目に涙を浮かべながら、まるで、神様でも拝むような従順な目つきでウサギを見ていることに白ウサギは困惑しました。

——いったい、この里はどうなっているんだ、まるで他の里とは違うぞ。まあ、いい。なんだかわからないが、ここは調子を合わせておいたほうがよさそうだ。

「そーだよ、いかにもボクはウサギさ。どうだい？今夜の二人の出会いを祝して、ご馳走を一緒に食べよう！ちょうどここに、おいしい野菜がある。これはさっき里の人間が、ボクにくれたものなんだ。キミ知ってる？人間の作った野菜は本当においしいんだぜ」

——あー、やっぱり、ウサギさんはお月様が遣わせてくれたすごい方なんだなあ。人間も敬うような尊いウサギさんなんだなあ。

その夜、タヌキは久しぶりにおなか一杯に食事にありつけました。でも、何よりタヌキがうれしかったのは、おなか一杯食べられたことよりも、誰かと一緒に食事ができたことでした。こうして、タヌキは白いウサギことを、すっかり月の遣いと思い込んでしまったのでした。

ウサギの目

「そうかい、キミはずっと長い事ひとりぼっちだったんだね」

白いウサギはおじいさんの畑の野菜を食べながら、愚鈍なタヌキの身の上話を聞いていました。

——こいつ、なんて、マヌケでウスノロなんだ。聞いているだけでイライラする！

白いウサギは愚鈍なタヌキが許せませんでした。白いウサギにとって愚かなこと、鈍いことはもっとも嫌いなことであり、カチカチ山のタヌキは、今まで出会ったどんなタヌキよりも愚かで、お人好しでした。

「キミは今日、とってもいいことをしたんだね。おばあさん、怪我をしてるんだね……」

——これはいい話を聞いた。あのおじいさんはオレのことを山の神の使いと勘違いしているらしいが、おばあさんはどうかな？タヌキの仕業だということを気づいているのかもしれない。ばあさんいは、うかつには近づかないほうがいい。

人間の作った作物に手を出してはいけない——カチカチ山の里にも他の里と同じような掟がありました。

でも、愚鈍なタヌキには、掟の意味がわかりませんでした。

愚鈍なタヌキにとって掟とは、ただただ、守らなければならないものであり、そのことを疑うこともなければ、意味を考えることもしませんでした。

自分が食べているものは人間の作ったもので、人間が白いウサギに贈ったもの。そしてそれを二人で食べている。タヌキにとってはそれだけのことでした。

——こんなにおいしいものを食べたのは初めてなんだなあ。これも全部ウサギさんのおかげなんだなあ。

野菜がおいしければおいしいほど、愚鈍なタヌキは白いウサギをありがたく思うのでした。

「そうかい、キミ、人間の作った野菜を食べたのはじめてなんだね」

——これは、使えるなあ。よし、役に立て。どうせお前なんか、このまま生きていたって、何もなすことなどできない。人間に捕まってタヌキ汁になるのがオチだ。オレ様の役に立ったほうが、死ぬまでの間、うまいものが食えるだけありがたいと思うんだな

白いウサギはすっかり高揚していました。

それは愚鈍なタヌキのささやかな喜びとはちがう、身を震わせるような快樂のようなものでした。

白いウサギの目は、爛々と赤く輝いていました。

カチカチ

カチッ、カチッ……カチッ、カチッ……

野菜を食べているウサギの首の辺りから、妙な音がします。

「ウサギさん、なんか音がするんだなあ」

愚鈍なタヌキにも、その音がウサギの首の辺りからしていることはすぐにわかったようです。

——ちい！まったく！こいつだけは！

それは白兎が里から追放された際に、戒めとして白兎の首にかけられた念珠。人間の食べ物に手を出した報い。人間の作った食べものを口にすると、首にかけられた念珠がカチカチと音を鳴らす。これでは人間に見つかってしまいます。だから白兎は、わざわざ重たい思いをして野菜を山の中まで運んだのでした。

「あー、これは……その……月に帰る為のお守りみたいなものさ」

——これはあのタヌキが作ったもの。いくらマヌケでも、さすがにこれが何かわかるか？

一瞬白いウサギは心配になったが、愚鈍なタヌキはもっとよく見せて欲しいとは言いませんでした。

——あれはウサギさん大事なものなんだなあ。きっとあれがなくなると、月に帰れなくなっちゃうにちがいないんだなあ。

でも、ボクは帰って欲しくないんだなあ

タヌキはウサギの首にかけられた念珠が、ウサギの白い毛の中に隠れるくらいに、しっかりと巻き付いていたので、あまり人に見せたくないものだと思ったのでした。

——こいつ、本当に鈍いヤツだ！なんて愚かなんだ！

白いウサギはその場で殴りかかりたいという衝動に駆られるほど、愚鈍なタヌキが許せませんでした。白いウサギにとっては『愚か』なことは罪であり、『鈍い』ことはこの世を生き抜くための真剣さに欠けると思っていたのでした。それこそが白兎の価値観であり、絶対に信じて疑わない『正義』でした。

——いずれにしても、念珠がある限り、あのじいさんの畑には近づけない。このウスノ口を利用して、畑から野菜を採るか、それともこの念珠をはずさせるか？

白いウサギは考えをめぐらせました。

——念珠を外す方法をこんなマヌケなヤツが知っているとは思えんしなあ。まあ、いい。いくらでもやりようはある。

「ボクはね、人間の作った作物を食べないといけないんだよ。このお守りの力が失われると……ボクは月に帰れなくなって、いずれ死んでしまうんだよ」
カチカチ山のタヌキは、哀しくなりました。

――ウサギさんが死んでしまうのは、とても悲しいんだなあ。でも、ウサギさんが月に帰ってしまうのも、いやなんだなあ。

「いいよ、僕、ウサギさんのために、おじいさんの畑の野菜をもらってきてあげる」

「ダメだよ。キミ、命を粗末にするものじゃない。人間はそう簡単にボクたちなんかに食べ物を分けてくれやしないよ。」

白いウサギは少しだけタヌキに近づいて小さな声で言った。

「ボクにいい考えがあるんだ。キミ、協力してくれるかな？」

タヌキはうれしくなりました。

誰かが自分を頼ってくれる。こんな僕が誰かの役に立つことができるなんて、なんて素敵なことなんだろう。

――僕、うれしいんだなあ。ウサギさんの役に立てるんだったらなんでもするんだなあ。

もしも白兎が正直に愚鈍なタヌキに事情を話していたとしても、カチカチ山のタヌキは、同じ事をしたかもしれせん。

なぜなら愚鈍なタヌキにとって、白いウサギさんは、お月様の贈り物なのですから。

赤い目

「いいかい、よく聞いておくれ」

まん丸だった白いウサギの目を少しだけ細めていった。

――どうせお前には複雑なことはできやしない。だから俺様の言うことをよーく聞くんだな。

「人間には、ボクやキミの言葉は通じない。『困ってます。食べ物を分けてください』なんていっても無駄さ。逆にこっちが人間の餌になってしまう。だから、夜中にこっそり人間の畑に行き、野菜を盗って来るんだ、ボクの分とキミの分と。いいかい、必ずキミの分も取ってくるんだよ。」

「でもそれは、やっちゃいけないだなぁ。里のみんながそう言ってたんだなぁ。」

愚鈍なタヌキは里の掟の意味など考えたことはありませんでした。だけど、守らなければならないものは守らなければならない。

タヌキは愚かで鈍感でしたが、律儀で実直でした。

「里の掟？なんだいそれは？そんなことに何の意味がある？」

白いウサギは信じられないという表情でタヌキを見た。

――こいつ、馬鹿か！

「ここにはキミしかいない、そして、ボクがいる。キミを捨てて里を出て行った連中の決めた掟なんて、いったい何の意味があるんだい？」

白いウサギは苛立っていました。

――お前は黙って俺の言うことを聞いていればいいんだ！

「でも僕は自分の食べる分はいらんだなぁ。だから、ウサギさんの分だけ持ってくるよ。だってウサギさんは人間の作ったものを食べないとだめなんだなぁ。僕は今までの食べ物で十分なんだな。」

白いウサギにとっては、愚鈍なタヌキが飢え死にしようが、なんだろうが、一向に構わないと思いました。白いウサギの分だけ盗って来るといふのなら、それでいいと思いました。だけど白いウサギには、そんな愚鈍なタヌキの従順さ、実直さが無性に腹立たしく思いました。この時はまだ、白いウサギにもわかりませんでした。

なぜ苛立つのか？

なぜ腹立たしいのか？

——タヌキに畑の野菜の味を覚えさせて、自分から進んで野菜泥棒をするように仕向けようと思ったのだが……コイツはいったい、何を考えているんだ！

その策にすんなり乗ってこないことへの苛立ちもありました。白いウサギには、愚鈍なタヌキが守る必要のない掟を守ろうとしたり、他人のことを心配したりするような自分にはない価値観をもっていることが疎ましくもあり、うらやましくもあったかもしれません。

少しでもタヌキのような心を持っていれば

少しでも従順さや人を思いやる心を持っていれば

——ちがう！ちがう！断じて違う！

白いウサギは心の中でそう叫びながら頭を振りました。

「キミはわかっていないよタヌキ君、キミはボクを困らせたいのかい？」

白いウサギはわざと悲しそうな顔をしながら言いました。

「どうしてなのウサギさん？」

タヌキは白いウサギの悲しそうな顔を心配そうに覗き込みます。

「ボクだけ食べるなんて、そんなことできると思うかい？キミが食べないのなら、ボクも食べない。だって、食べられるわけないだろう。ボク一人で。食事は同じものを同じだけ食べる。キミとボクは友達じゃないか！」

その言葉を聴いてタヌキはハッとしました。

——友達……友達って言ってくれたんだなあ。ウサギさんが僕を友達って言ってくれたんだなあ。

タヌキはあまりのうれしさに目が真っ赤に充血し、大粒の涙を流しました。

「僕たち友達なんだね」

——クソー、なんで俺はこんなヤツのこと友達だなんて！畜生！畜生！

白いウサギは、愚鈍なタヌキとは違う理由で目を真っ赤に染めていました。

こうして愚鈍なタヌキは白いウサギのために、ウサギの分とタヌキの分の野菜をおじいさんの畑から盗むようになりました。最初のうちは、おじいさんに迷惑がかからないように、少しだけしか盗りませんでした。白いウサギの喜ぶ顔が見たくて、タヌキが盗み出す量は日に日に増えていきました。

愚鈍なタヌキは困り果てていました。
——おじいさんとおばあさん、食べるのに困っていないかなあ？

愚鈍なタヌキは白いウサギに内緒で、薬草のほかに今まで自分が食べていた木の実や小川で捕れた魚をこっそりおじいさんとおばあさんの家に置いていきました。家にいたおばあさんは時々見かけるタヌキの姿を不思議に思っていました。畑を荒らすのもタヌキ、薬草やほかの食べ物を持ってくるのもタヌキ。おばあさんが、この話をおじいさんにすべきかどうか考えているところに、おじいさんが畑仕事から帰ってきました。

「まったく！タヌキのやつ、今度という今度は許さねー」
おじいさんはすごい剣幕で怒っています。

今までタヌキは出来上がった野菜を少しずつ持っていつているようでしたが、せっかく植えた野菜の種を掘り返して、持って行ってしまったのです。
「ちっとやそつとなら、目をつぶることもできっけどよ、種まで手え出すんじゃあ、放ってもおけねー」

愚鈍なタヌキはどんなに愚かでも、畑の種を掘って持って行きはしませんでした——これはおじいさんの勘違い。前の日の夕方、おじいさんが畑仕事を終えてすぐに、いたずらカラスが、おじいさんが植えたばかりの種をついばんでいたのですが、カラスの歩いた後に、夜中にタヌキが足跡をつけてしまったので、おじいさんはカラスの仕業だと知らずに、タヌキがやったと思い込んでしまったのです。

「罨をさ仕掛けて、タヌキさ、とっ捕まえねばよー」
おじいさんは軒先でタヌキを捕まえる罨を作り始めました。

おばあさんはおじいさんに話しかけました。
「おじいさん、ほれ、今日もどこぞのどなた様が、また川の魚を持ってきてくれましたよ」

おじいさんは手を止めて桶に入っている川魚を眺めました。

「おー、おー、これは山の神様がまた遣いをよこしてくれたかのー、ありがたい話じゃ。」

「そー言えば、いつぞや地蔵様にお礼の品をお供えしたときに、きれいな真っ白いウサギが顔をだしたなあー」

「もしかしたら、あの白いウサギが山の神様の遣いかもしれんのー」

「あら、そーですか、白いウサギ...・・・それはありがたいですね」

おばあさんはどこか気になりましたが、おじいさんが言うことを否定する気にはなれませんでした。

二人は長い間、こうして苦楽を共に過ごしてきたのですから。

兎の餅つき

「ねえ、ウサギさん。君は餅をつかないのかい」

ある満月の夜のこと、愚鈍なタヌキは白いウサギに聞きいてみました。

「ボクはね、タヌキくん、人間の作った野菜しか食べないって、言っただろう。」

白いウサギはタヌキを睨みつけました。

「それにね、ボクは杵と臼は持ってないんだよ」

いくら愚鈍なタヌキでも、白いウサギがこの話をしたくないのはすぐにわかりました。

「ごめんなさい、ウサギさん。ボクは君を怒らせてしまったみたいだね」

白いウサギは大きく深呼吸をして、心を落ち着かせました。

――こいつ、なんでこんなことを訊く！畜生！思い出させやがって！

「さあ、今日はもう休もう……ボクは少し夜風に当たってから休むことにするよ」

そういい残して白いウサギは、月明かりの中に消えていきました。

――ぼ、僕、ウサギさんに、悪いこと、してしまったんだなあ

愚鈍なタヌキは哀しくなりました。

もしかしたら、もう白いウサギは戻って来ないかもしれない。そんな不安がタヌキの心を揺さぶります。

村人たちが山を荒らし、里の仲間たちが山を降りてしまっただけでなく、カチカチ山のタヌキは独りで暮らしてきました。だから独りでいることにすっかり慣れてしまっていました。でも、白いウサギが現れ「ぼ、僕、独りぼっちじゃないんだなあ、きっと、お月様の贈り物なんだなあ」と喜んだタヌキは、何よりも白いウサギのことを大事に思いうようになりました。

ウサギのためなら、どんな辛いことでも耐えられる。

ウサギのためなら、自分が犠牲になってもいい。

タヌキはいつもそんなことを考えていました。

しばらくすると、白いウサギは、何事もなかったかのように戻ってきました。白いウサギは寢床に入ると、すぐに寝てしまったようです。

――よかった、ウサギさん帰ってきてくれたんだなあ。

タヌキは安心して眠りに着きました。

その夜、タヌキは白いウサギと仲良く暮らす素敵な夢を見ました。でもその横で、白いウサギがとても哀しく、つらい夢を見ているとは、愚鈍なタヌキには知る由もありませんでした。

ウサギとカメ

「カメさん、キミはなんてのろまんない？もしかしたら世界で一番のろまな遅い生き物だね」

「そうかい、ウサギさんがそんなに言うのなら、一度かけくらべをしてみるかい？」

「は一、はっはっはっ！こりゃーいい、カメがウサギとかかけくらべするって？キミは足が遅いばかりじゃなくて頭の回転も遅いらしい！」

「ウサギさん、キミは確かに足は速い。だけど、ボクは決して世界で一番のろまんないじゃないんだよ」

「わかった、わかった、お願いだからこれ以上ボクを笑わせないでくれるかな？それともキミはボクが笑っている間に、先に行こうっていうのかい？」

「ウサギさん、じゃあ、キミが笑い疲れてしまう前に、決めるとしよう。南の山の頂上にある大きな杉の木にどっちが早く着くか競争しよう」

「あー、いいともさ、で、いつ始める？カメさんの好きな時でいいよ」

「ありがとう、ウサギさん。ボクは他の人に自分が必死になって走るところを見られたくないからね。勝負は今晚、あそこに見える地藏様の前に集まって、東の谷から月が見えたら始めよう」

「いいともさ、キミもボクに負けるころを他の人に見られたくないだろうからね。まあ、ボクとしては観客が一杯いたほうが、やりがいがあるのだけどね……」

「そうそう、ウサギさん、どちらが早く杉の木に到着するのを見届ける立会人を決めないといけないね……南の山のフクロウの爺さんなら、夜中でも引き受けてくれるかな？」

「なるほど、カメさん！それはいい考えだね」

「ボクじゃとても間に合いそうもないから、ウサギさん、今から南の山に行ってフクロウの爺さんをお願いしてきてくれないかい？」

「――ウサギさん、君が悪いんだよ。僕はこういうのあまり好きじゃないんだ。でも君が僕をのろまだって馬鹿にするから……」

「いいとも、御安い誤用さ、じゃあキミは始めの合図をする立会人を……そうだな、おしゃべりカラスに声をかけておくれ。そしたらボクが、フクロウの爺さんにおしゃべりカラスの鳴き声で、競争が始まると伝えるから。」

「――まったく、なんてウスノロで間抜けなカメなんだ！ボクに勝てると本気で思っているらしい。」

「ああ、いいよウサギさん、それでおしゃべりカラスにはどんなふうに鳴いてもらう？」

「そうだな、南の山に向かって3回大きな声で『カァ、カァ、カァ』って鳴いてもらうように頼んでくれ、間違いがあっちゃいけないからね」

――しかし、普通にかけくらべして勝つだけじゃ、逆にボクが笑いものになってしまうかもしれないなあ。

「じゃあ、カメさん、ボクはひとつ走り南の山まで行ってくるよ」
――何かみんながボクの速さに驚くような趣向はないものかなあ。

足の速いウサギは、いろいろと考えましたが、何もいい考えが浮かばないまま、フクロウの爺さんが住んでいる南の山の頂上へとたどり着きました。

「おーい、じーさん！ふくろーのじーさんよー、起きてるかーい」
「なんだね、こんな時間に……まだこんなに日が高いじゃないかい」
「いやー、申し訳ない、実は――」

「話はわかったが、あんたもあまり弱いものをいじめるものじゃないよ。誰が考えたって、カメがウサギに勝てっこなんてありゃしない。よっぽど重たい荷物でも背負わない限りねー」

「重たい荷物……なるほど！さすがは爺さん！それはいい考えだ！」
――そうか、そうだな、何か重たいものを背負って、それでもカメより先に着いたとなれば、みんなも褒めてくれるにちがいない！

「じゃあフクロウさん、おしゃべりカラスが3回『カァ』と鳴きくのが合図ですから、立会いのほう、よろしく頼みますよー」
――さて、大急ぎで戻って、何か重いものを探そう

ウサギが駆け足で山を降りていく様子を見て、フクロウの爺さんはつぶやきました。

「浅いの一、軽率なウサギよ。どんなに足が速くとも、知恵なきものは道を見失い、行くべきところにはたどり着かん。まあ、これも、ウサギのためじゃ、きつい御灸だが、生きていくためには勉強しないとイケない」

軽率なウサギは、登ったときの倍の速さで山を駆け下りていきました。

「ふー、調子に乗りすぎて、少し疲れたなあ」

「どうしたんだい、ウサギさん、そんなに急いで？」

「やー、これはタヌキさん、実は、ボク、カメさんと競争することになって……」

「おや、まあ、それはカメさんも無茶なことを！でも、キミも大変だね。もし負けでもしたら、みんなの笑いもの、この里にもいられないね。」

「心配はご無用！万が一にもウサギがカメに負けることなどありませんよ」

「それよりタヌキさん、ボクは、どうせ勝つなら、みんなをあっと思かせるようなことをしたいと思うのだけど……」

「ほー、それは、どんなことだい？」

「たとえば、そう、何か重たいものを山の頂上まで背負って走るとか――」

「それは確かに大変だ！じゃあ、重ければ重いほど、キミがすごいってみんなが思うってわけだ」

「そーなんだけど、何を背負って走ればいいのか……タヌキさん、何かいい考えがあるかい？」

「そーだなあ、重たいもの岩や丸太を担いでも、あまり面白みがないものなあ。

――そう、たとえば餅つきに使う杵とか臼とか……でも、これは重たすぎるかな？」

「おー、そうだ、そうだ、ウサギといえば餅つき、タヌキさんいいことを教えてくれました！」

「キミ、本気であんな重たいもの担いでいく気かい？」

「ご心配なく、このくらいのことをしないと、カメさんに勝ってもちっともうれしくない」

――ウサギ君、君はいつもそうやって調子に乗る。危なっかしくて見てられない。きっとキミは大事なものを失うことになるよ。

ウサギは急いで家まで杵と臼と取りに戻りました。

「いやいや、これは思ったよりも大変だぞ」

――とりあえず地藏様のところまで運ばなきゃ、そろそろ日が暮れる。

「ヨッコラショ、ヨッコラショ」

「ふー、昼間にこれだけ動いたらさすがに疲れた。月が昇るまではまだ時間があるな。一休みするとしよう。」

日が暮れ始めた頃、ようやくウサギはかけくらべを始める地蔵様のところにたどり着きました。休むまもなく東の谷から月が昇り、『カァ！カァ！カァ！』と南の山に向かってカラスが3度鳴きました。

——これは見ものだ。ウサギのヤツ、カメに負けたら里じゅうに言いふらしてやる。

「ウサギさん、それじゃあ始めようか」

カメは一步一步ゆっくりと南の山に向かって歩いてゆきます。

——なんてのろまなんだ！

「じゃあ、ボクは先に行って餅をつきながらキミが来るのを待つとしよう！」

ウサギは、杵と臼を抱えてカメの横を通り過ぎると振り返りもせず南の山に走っていきました。

「ふー、さすがに疲れたなあ、まあ、途中で休憩をしよう……そういえば、さっきフクロウの爺さんに会いに行った行時、山の中腹に眺めのいいところがあったなあ。あそこで休憩して腹ごしらえでもするか」

ウサギはカメには目もくれず、すごい勢いで山を駆け上がって行きました。

「ふー、着いた、着いた、よし、ここで休憩しよう」

「なんてきれいなお月様なんだ」

「こんな夜には月を眺めながらまん丸団子を食べたくなる」

ペタンコ！ペタンコ！ペタンコ！ペタンコ！

でーきた でーきた

おいしい おいしい お一団子

まんまる まんまる お月様

「あー、お腹一杯だあ、今日は疲れたなあ、どうせ、カメさんはしばらくかかるだろう……ふう
うわあああー、眠たくなってきたなあ……一休み、一休み」

夜は更けて

静かに時が過ぎてゆく

兎を置いて過ぎてゆく

そーっと、そーっと過ぎてゆく

「ウサギさん、ウサギさん……」

「うむうーん、うん？あつ、朝！」

「大丈夫かい、ウサギさん、キミ、確かカメさんとかけくらべをしてるんじゃないのかい？」

」

「あー、タヌキさん、そうですとも！ボクは急がないと！」

「忘れ物ですよウサギさん、これはキミの大事な杵と臼……こんなところに置いていっては、誰かに持ち去られてしまいますよ」

「いいんです、もう、杵と臼はどうなっても、ボクは行かなければならない、なんならタヌキさんに差し上げましょう」

――これは寝すぎた、しくじった！、くそー、間に合え！間に合え！

どんなにウサギが早くとも

どんなに長く走っても

のろまのカメに追いつけない

どんなにカメがのろまでも
いねむりウサギには
負けられない

「やあー、ウサギさん、どうやら今回はボクが勝ったみたいだね」
――君が悪いんだよウサギさん。ボクは努力を惜しまない。キミはそんなボクをいつも馬鹿にしたんだからね。

「ウサギともあろうものがカメに負けるとは！相手を見て勝負を見ない者は敗れる！」
――戒めじゃ。これに懲りて己の愚かさを見つめ、他者を蔑むようなことはせぬことじゃ。

「アホウ！アホウ！あんまりおそい ウサギさん！ さっきの自慢は どうしたの！」
――こりゃ、おもしろい、鼻持ちならない白兎、辱めをうけるがいいよ。

「これ、前から欲しかったんだなあ。僕は大事に使うんだ。決して粗末にしないよ」
――家に帰ったら早速餅つきはじめよう。ウサギさんには悪いけど……

人の噂も七十五日。

カラスの広めた噂は里じゅうに広まりましたが、いつの間にか忘れ去られました。ウサギはタヌキに頼んで杵と臼を返してもらおうとしましたが、タヌキはウサギに言いました。「ウサギ君、今度は僕と競争するかい？もし君が勝ったら杵と臼は返そう。――だけど僕は負ける気がしないんだ。君は確かに足は速いけど、僕等には僕等の戦い方がある。悪いことは言わない。恥の上乗りをしたくなかったら諦めるんだね。」

ウサギは悔しくて悔しくて仕方がありません。ウサギは目を真っ赤にしなが、悔しさのあまり、飛び跳ねました。タヌキの言葉を聞いてウサギはようやく自分がカメに『はめられた』のだと気がつきました。他の人が忘れても、ウサギはこの悔しさを忘れることができませんでした。

それ以来、ウサギは満月の夜には飛び跳ねるようになったのです。
あの悔しい出来事を思い出して……

うさぎ うさぎ なにみて跳ねる
十五夜 お月様
みて 跳ねる

……畜生！畜生！畜生！

「ちいっ！またあの夢か！」

白いウサギは飛び起きました。愚鈍なタヌキはまだ眠っています。

あいつら全部グルだったんだあ！カメもフクロウもカラスもそしてタヌキも！
でなきゃ俺様があんなカメなんかに負けるわけがない。
ウスノロでマヌケなあんなヤツに！
畜生！タヌキのヤツ……にやけた顔して俺のこと笑ってるのか！

白いウサギは許せませんでした。

自分の横でニヤニヤと笑いながら寝ているタヌキが……

ウスノロでマヌケな存在が……

そして何よりそんなものに負けた自分が許せませんでした。

だから白兔は走ったのです。

誰よりも早く、野を駆けれるように。

だから白兔はすべてを疑ったのです。

長い人生の道筋に張り巡らされた、たくさんの罟をかいくぐる為に。

「ねえ、ウサギさん、何か心配事でもあるのかなあ？」

愚鈍なタヌキは白いウサギの様子がおかしいことに気付きました。なぜならタヌキはずっと白いウサギを見ていました。そしてずっと白いウサギのことを考えていました。

「キミはそんなこと気にしなくていいんだよ。まったく必要ないんだ」

白いウサギは不機嫌でした。タヌキの愚直なところがイヤでたまりませんでした。そしてなによりも、愚鈍なタヌキに自分のことが見透かされているような気分になるのが許せませんでした。

.....お前なんか嫌いだ。

タヌキがどれだけ自分のことを心配してくれているか、白いウサギにはよくわかりました。ですが、タヌキはウサギが一番気付いて欲しいことをわかっていませんでした。それは白いウサギがタヌキに心配されることを快く思っていないということ——白いウサギはタヌキの鈍感なところが大嫌いでした。

.....いや、オレが嫌っていいようがいまいが、タヌキにとっては問題じゃないんだろうな。

そう思うと、いっそう白いウサギはタヌキのことが疎ましく思えた。

.....だから.....お前なんか.....大嫌いだ！

「すまない、タヌキ君、本当はキミの言うとおりに、ちょっと気分が優れないんだ。まだ、昼間だけど、おじいさんの畑のおいしい野菜が食べたいな。そうすればきっと元気になると思う」

.....頼むから！俺のそばから離れてくれ！

「わかったよウサギ君、ちょっと様子を見てくるんだなあ」

「あー、そうだ、これを少し口に含むとすっきりするんだなあ」

そう言って愚鈍なタヌキは1枚の葉をウサギに手渡しました。

「あまりおいしくはないけど、ちょっとした薬みたいなもんなんだなあ」

——タヌキが渡した葉は、ゲンノショウコと後に呼ばれる薬草。イシャイラズ、たちまち草などとも呼ばれている。

愚鈍なタヌキは薬草のことをよく知っていました。その多くの知識は、愚鈍なタヌキの大好きなタヌキのおばあさんの知恵でした。

「でも、僕がいない間に、似たような葉を捜して食べてはいけないんだなあ」

——このゲンノショウコという植物の葉は、ヤマトリカブトの葉と似ており、これはよく知られている毒草。

「ありがとう、よくわかったよ、キミ、薬草には詳しいんだね」

そういいながらも、白いウサギはどこか腹立たしく思っていました。

……なんでこんなヤツに心配されなきゃならないんだ！

ウサギは自分の仮病の演技がそれほど上手なものではないと、自分でわかっていました。というよりも、むしろ嘘とわかるくらいに下手な演技をしたつもりなのに、タヌキにはまったくそれが伝わっていません。

……こんな鈍いやツに！

かつて白兎を手玉に取ったあのタヌキは狡猾でした。だからウサギはタヌキを信用する気にはなれませんでした。でも、愚鈍なタヌキは白いウサギがほとんど気がめいってしまうほど純粹でした。

……俺をそんな目で見るとなあ！

ウサギはただ、しばらくの間、タヌキの顔を見たくないだけでした。だから、無理なことをタヌキに言えば、少なくとも今日の夜までは、顔を見なくてすむと考えたのです。しかし、白いウサギは思慮が足りませんでした。どれだけ愚鈍なタヌキが白いウサギのことを大事に思っているか、どれだけ心配しているか、そんな風に誰かを思いやったり心配したことの無い白いウサギはわかるはずもありませんでした。

「ウサギさん、よくなるといいんだなあ」

タヌキはおじいさんの畑につくまでの間、白いウサギのことばかり心配していました。タヌキが畑のそばまで来るとおじいさんは汗水たらして畑仕事をしていました。

.....やっぱり昼間は無理なんだなあ。

.....でも、ウサギさん、困ってるんだなあ。

愚鈍なタヌキは考えました。自分だけのことなら、そもそもおじいさんの畑を荒らすようなことはしません。できればおじいさんの畑のものには手をつけたくないと思っていました。タヌキは暗くなるまで待つしかないと思いましたが、おじいさんが水を汲みに畑を離れたときにこっそり畑に忍び込むことを思いつきました。

.....ウサギさんみたいに早く走ればいいのになあ。

タヌキは白いウサギが大好きでした。月夜に白く輝く姿はとても凛々しくて、この世のものとは思えないほどでした。そして白いウサギが野山を疾走する姿は、可憐でしかも力強くたくましいものでした。

.....僕もやってみるんだなあ。

時として他人への憧れは、それを真似することによって満たされます。愚鈍なタヌキは白いウサギに憧れているうちに、自分もウサギのように可憐に走り回りたいと思いました。なぜならタヌキは白いウサギが大好きだったからです。

「こらあ！このいたずら狸め！」

愚鈍なタヌキはウサギのように畑に駆け入りましたが、おじいさんにはタヌキにしか見えませんでした。

.....まずいんだなあ

.....でも、野菜を持っていかないと

タヌキはおじいさんの声に驚いて、逃げ出しましたが、どうしても白いウサギのために野菜を持って帰りたいと思いました。するとタヌキの逃げた方向に、野菜が落ちているのが見え

した。何か縄のようなものが見えた気がしましたが、タヌキは野菜を加えようと、その縄のようなものをくぐり野菜を加えて逃げようと思いました。

が、しかし……

「どこまでも欲深いタヌキだなー。こんな罠に引っかかるとはよー」

もしもタヌキが夜にウサギと一緒に来ていたら、ウサギはこんな罠のことは見破っていたに違いありません。夜まで待てば、ウサギはいつものように見張りに来てくれたかもしれません。でも、愚鈍なタヌキはやさしかったので白いウサギのために野菜を採りたかったのです。なぜならタヌキは白いウサギのことが大好きだったからです。

ごめんなさい

どんなにもがいても、身体に巻きついた縄は取れませんでした。

ぐー、ぐー、ぐー

狸はもがき苦しみながら泣き喚いてます。

「このいたずら狸が！悪さばかりおって！」

愚鈍なタヌキはすっかり困り果てました。

……困ったんだな、これじゃ、ウサギさんに野菜をもっていけないんだなあ。

愚直なタヌキは自分がこれからどうなるかという心配よりも、白いウサギがおじいさんの作った野菜が食べれなくなることが心配で心配で仕方がありませんでした。

そこに騒ぎを聞きつけたおばあさんがやってきました。

「まあ、まあ、かわいいタヌキさん」

「かわいいものかね！ばあさんや、とうとう昼間にまで畑を荒らしにくるなんて、にくたらしい！」

おじいさんは少し興奮して息が荒くなっていました。

「まあ、まあ、おじいさん、この子もなんぞや、訳があって畑の野菜さ採りに来たんだべさ。最近じゃ、この山もすっかり荒れてしまって、食べるにもこまったんかのお」

「だども、ばあさんよ、タヌキに畑のもの食べられたらこっちが飢え死にしてしまうわさ」

「んだあなあ、けど、殺すのだけは勘弁してあげてやれんかのお、じいさんや」

「はてえー、どーするかのー」

「どうしたもんかのー」

二人は相談して、しばらくこのままタヌキを罾につないでおくことにしました。

くー、くー、くー

きつく締め付けていた縄を苦しくないように結び直してあげると狸は少し落ち着いた様子でした。

……やっぱり、おばあさんはやさしいんだなあ

……わかったんだなあ

.....ごめんなさいなんだなあ

.....僕が悪いんだなあ

.....ごめんなさい、おばあさん

.....ごめんなさい、ウサギさん

駆ける白兔

ウサギの思ったとおり、愚鈍なタヌキは夜まで戻ってきませんでした。正直、人間の野菜も少し食べ飽きて、今日は普通の草を食べたいと思っていました。
.....こんなところあのタヌキに見せられないからな。

ウサギはタヌキからもらったゲンノショウコを食べたおかげか、身体がすっきりしていました。
.....ちがう、タヌキがいなくなって精々しただけさ。

ウサギは久しぶりに独りの時間を満喫していました。
.....たとえタヌキが途中で戻ってこようと、ボクのこの耳が必ずタヌキが近づいたことがわかる。

「なんせ、あいつはドンくさいからな」

白兔は全速力で野山を駆けながら思いました。
「どうだい、タヌキ君、キミ、こんなに早く走れないだろう？」
「ウサギさん、すごく早いんだなあ。すごいんだなあ」
疾走する白いウサギを必死で追いかけてくる愚鈍なタヌキ.....

「ちいい！なんで俺がヤツのことなんか！」

白兔はビックリしました。この山にきてからずっと、愚鈍なタヌキと行動をともにしてきました。タヌキの愚かさ、鈍さは白兔をイライラさせましたが、仲間に里に独り置き去りにされたタヌキと里から追放された自分が、こうして一緒にいることに、なにか特別な意味があるような、そんな思いがわきあがるようになっていました。
.....なんだいなんだい！俺は、あいつが.....あいつが大嫌いだ！

白兔はさらに早く、風のように山を駆け巡ります。
.....だけど.....なんなんだ、この違和感は！

白兔は駆けるのをやめて、自分自身に向き合いました。
.....俺は.....ヤツのことを心配しているのか？このモヤモヤとした感じはいったいなんなんだ！

白兔の脳裏に一瞬罨に掛かり身動きが取れなくなったタヌキの姿が映りました。
「待てよ.....まさかあいつ、いやそんなはずは.....だけど」
「えーい、世話の焼ける！」

ウサギは再び駆け出しました。
.....くそー！俺としたことが！

ウサギは一瞬冷静さを取り戻しましたが、自分のうかつさに頭に血が上りました。
.....あの馬鹿！まったく！なんて愚かなんだ！間に合え！間に合ってくれ！

ウサギはものすごい速さで野山を駆け巡り、ふもとまで降りてきました。そして目的の場所、おじいさんの畑が見えてきたとき.....白兔が予想していた最悪の事態になっていることがすぐにわかりました。

「ちいっ！」

白いウサギは、思わず舌打ちしました。

「なんてうかつな！」

それは、捕まった愚鈍なタヌキに対してではなく、こうなることを予想できなかった自分——いつもであれば回避できる障害であるはずなのに、冷静な判断ができなかった昼間の自分に対するものでした。

何よりも白いウサギを不愉快にさせたのは、自分がいつの間にか愚鈍なタヌキの身を案じていたことでした。

まったく……なんで俺があいつのことなんか！

なんて不愉快なヤツだ！こんな不愉快なことがあってたまるか！

白いウサギはしばらく考えました。

「……どうやら、いますぐ殺されたりはしないようだな」

おじいさんとおばあさんはどうやらタヌキをすぐには殺さず、しばらく縄につなぎ止めて置く様子でした。

「……とりあえず、夜まで待つしかなさそうだな」

白いウサギは、暗くなるまで遠くから様子を見ることにしました。

「さて、どうしたものか？」

白いウサギは、暗くなるまでの間、いろいろと考えてみました。

このまま、タヌキがおとなしくしていれば、人のよさそうな老夫婦だ。もしかしたらタヌキは許されるかもしれない。逃がしてはしてもらえないかもしれないが、タヌキを縄につないで置いて、飢え死にしないくらいの餌を与えてくれるかもしれない。

殺されて食べられてしまうとしても、ボクにはなにもできないし、その場合は、この里を出るしかないなあ……多少目覚めは悪いが、それはそれでいい。だが問題は……このままニンゲンに飼いならされるか、あるいは許されて逃がされるかした場合だ。

白いウサギはこうして冷静に事態を分析し、考えをめぐらせることが好きでした。『よく考えもせずに行動することは、ぜったいにしない』とあの日以来、心に誓ったのですから。それに、元来ウサギは機敏で用心深く、思慮深いのです。

.....もし許されたとして、結局タヌキはジレンマに陥る。多分二度と畑は荒らさないと、そう決めながらも、『ウサギさんのために何かしたいんだなあ』とか言って、きっとまた無茶なことをしでかすに決まっている。

なぜならあいつは.....ヤツは愚かで、鈍くて.....そして誠実.....

白いウサギは思い出していました。里を追い出され、行くところ行くところで厄介者扱いされながら、不意に立ち寄ったこの場所は、ウサギが好んで食べるようなものは、まるでないような痩せ細った土地でした。そこで出会った愚鈍なタヌキは、自分を月の使者と勘違いして、世話を焼く.....疎ましいと思いながらも、今日まで過ごしてきた時間は決して悪いものでもなかったかもしれない.....ここに来てあの愚鈍なタヌキに出会わなければ、今頃どうなっていたのか？

「かといって、俺があのだタヌキに何の恩義を感じる必要がある。あいつはただ、自分で勝手に俺を『月の使い』だと勘違いしただけだ.....悪いのはあいつなんだ.....今回もあいつは勝手に.....」

「そうだな.....あいつを説得して別の場所で一緒に暮らすのも悪くないか.....」

白いウサギは、いつの間にかタヌキの存在がウサギにとって無視できないものになっていること認めざるを得なくなっていました。

「いずれにしても、助かればの話だが.....」

覚悟

愚鈍なタヌキは、後悔していました。

.....ボクには無理だったんだなあ

白いウサギに憧れ、自分もあんな風に野を駆けてみたい、『できるかもしれない』と思った自分はなんて愚かで鈍いんだろう。そして自分が捕まってしまったばかりに、ウサギさんは人間の作った野菜を食べられない。このままでは月に帰れなくなってしまう。すべては自分がいけないんだ。

「僕は、やっぱり、いないほうが、いいんだなあ」

タヌキは、とてもとてもさみしい気持ちになりました。そして、カチカチ山を離れた昔の仲間のことを思い出していました。

「みんな元気であるかなあ」

タヌキは思いました。

「そうだ、僕は、おじいさんとおばあさんに迷惑をかけたのだから、このまま、あの二人に食べてもらえばいいんだな。ウサギさんは僕と違って機敏で用心深いから、きっと一人でも大丈夫なんだなあ」

タヌキは心の中で、みんなにお別れを言いました。

「まぬけでごめんなさい、のろまでごめんなさい、生きていてごめんなさい」

やがて日が暮れて、夜になりました。家の中からおじいさんとおばあさんが出てきました。タヌキは覚悟を決めました。

.....もうお別れなんだなあ

きゅーん、きゅーーん

愚鈍なタヌキは死ぬことを覚悟していましたが、それでも『死』がどういうものかがわからないので怖くて怖くて仕方ありませんでした。

.....死ぬってどういうことなのかなあ

善行をせず、悪行にふける魂は、死んだあとに、今よりも魂の階位が落ち、再びこの世に生まれたときに惨めな生き方を強られる一タヌキのおばあさんが、自分や里の子供たちを叱るときによく言っていたと愚鈍なタヌキは思い出しました。

愚鈍なタヌキにはよくわかりませんでした。悪いことばかりしていると、生まれ変わったときにタヌキに食べられてしまうような魚や虫のような小さな動物に生まれ変わり、かつての自分と同じ存在に命を脅かされながら生きなければならない。そして生き残ることができなければ、次に生まれ変わったときに、更にその小さな生き物に食べられてしまうようなさらに小さな小さな存在に生まれ変わる。

そういうことを輪廻というらしいのですが、おばあさんは死んだ後のことは教えてくれましたが、『死』が痛いことなのか、苦しいことなのか、怖いことなのかは教えてくれませんでした。

.....やっぱり、怖いんだな、死ぬって、きっと怖いんだなあ

ただ、一つだけ、愚鈍なタヌキが死についてわかっていたこと——『死は悲しい』ということでした。それは大好きなおばあさんが、自らの死によって最後にタヌキに伝えてくれた大切な教えでした。

きゅーん、きゅーん.....くー、くー、くー

どうやら狸はひどく怯えているようでした。

「こーれ、これ、そんなに怖がらなくても、なんもせんからよ」

おばあさんはそう言うとおじいさんとおばあさんが食べ残した魚の頭や野菜の切れ端を狸のすぐそばにそっと置きました。

「おれらも、ろくなもんさ食べねーからよ。こんなもんで、腹いっぱいにならんかもしれんが、ねーよかましだろー」

そう言うとおじいさんはふちの割れたお椀に水を入れたものをそばにおいてくれました。

「まあ、今日はこれでな。おめーをどーすっかまだ、わかんねーけど、飢え死にされても目覚め悪いからよー」

そうって食べ物と水を置くとおじいさんとおばあさんは家の中に戻ってしまいました。

くー、くー、くー

狸はまだ、鳴いています。しかし、それは怯えて鳴いているのではなく、うれしくて鳴いているようでした。でも、おじいさんと、おばあさんには、その違いがわかりませんでした。

選択肢

遠くからこの様子をずっと伺っていた白いウサギは、少し安心しました。

「まあ、今日は、何もおきそうもないか。時間があるということは、それだけ対策を立てることができる。まずは、よしとするか。」

白いウサギは、捕まったタヌキの様子をもっと近くで見ることとも考えましたが、あの狸のこと、大声で騒がれても厄介だと考え、このまま山まで戻ることになりました。

「それにしても……」

……それにしてもあのタヌキ、よくも生きていられたものだ。あんな愚鈍なタヌキがこうして独りでずっと生きられたのも、なにか特別なわけでもあるのだろうか？

「普通ならとっくに死んでいる」

白いウサギは、どこかタヌキを羨ましく思っていたのかもしれませんが、もし、ウサギがそんなことを考えている自分自身のこと気付いたとしたら、きっと激怒していたに違いありません。

……そういう生き方もあるということなのだろうか？

自分には決してそんな生き方はできない——できたのかもしれないけど、白兎には今の生き方を選んだ。たとえ他の選択肢があり、それを自由に選ぶ選択権があったとしても、たぶん、愚鈍なタヌキの生き方はしなかつただろう。

あのこと——カメとの駆け比べのことがあろうがなかろうが、自分はこの生き方を選んでいただろうし、後悔はしていない。

それでも、白いウサギは、自分が今こうしてカチカチ山にいることに、『何か特別な意味があるのではないか？』と考え始めていました。

「……選ぶのは自分だ」

そうつぶやいて、山の中に消えていきました。

次の日、慎重なウサギは昼間からタヌキの様子を見におじいさんの畑のそばまで行きました。
「どうやら今日も安心みたいだ」

おじいさんは畑仕事の合間を見ては、ときどきタヌキになにやら話しかけているようようでした。

「いったい何を話しているんだ？」

慎重なウサギは、話の内容が気になりましたが、人間に見つかるわけには行きません。夜になると、昨日と同じように食事を終えたおじいさんとおばあさんが、タヌキになにやら食べ物を与えているようでした。

「いったい人間は何を考えているんだろう？」

おじいさんとおばあさんはタヌキに食べ物を与えると、なにたら楽しげに話をしています。

「二人が寝静まったら、様子を見に行ってみるか」

慎重なウサギはおじいさんとおばあさんが明かりを消して眠るのを確認してからそっとタヌキのそばに近づきました。

「声を出さないで、タヌキ君」

愚鈍なタヌキは慎重なウサギが近くに來たことに気付かなかったので、ウサギの声にビックリしました。

「ああ。ウサギさん」

「し——っ、静かに」

慎重なウサギはあたりを見回しましたが、おじいさんとおばあさんはすっかり眠ってしまっているようでした。

「よかった……キミ、大丈夫そうだね」

慎重なウサギはタヌキのそばに來てささやくように言いました。

「キミ、なんでこんな無茶なことをやらかしたんだい？」

愚直なタヌキは目を潤ませながら言いました。

「ウサギさん、僕、怖かったよお、でも、おじいさんとおばあさんはやさしくしてくれて……」

今にも泣き出しそうなタヌキを見て、慎重なウサギはタヌキを落ち着かせようとしてしました。

「大丈夫、大丈夫だよ、タヌキくん、だからお願いだから鳴くのはよしておくれ、おじいさんに気付かれたら大変だ」

慎重なウサギはあたりを見回しながら言いました。

「大丈夫なんだなあ、おじいさんもおばあさんもやさしいんだなあ」

少し落ち着きを取り戻した愚直なタヌキは、ウサギと同じように小さな声で言いました。

「ウサギさんこそ大丈夫かい？昨日も今日も何も食べてないんじゃないかい？」

慎重なウサギは、驚きました。驚いたと同時に、無性に腹が立ちました。

——なんだよ、こいつ、なんで、俺の心配なんかできるのさ！

「ボクのことはいいんだよ、タヌキくん、それよりキミ、これからどうするんだい？」

慎重なウサギはタヌキに自分の感情を気取られないように落ち着いたフリをして言いました——

——もっとも狡猾なウサギは愚鈍なタヌキが気付くはずはないと確信していました。

「ウサギさん、僕は思うんだなあ」

愚直なタヌキは語り始めました。

「僕は里の掟を破って、しかもあのおじいさんとおばあさんを苦しめてきたんだなあ。こうして縄に繋がれて、今は十分なご飯を食べさせてもらっているけど、いつか食べ物がなくなったとき、あの二人のためなら僕はこの身を捧げるつもりなんだなあ」

「ただ、僕は君のことが心配なんだなあ、ウサギさん。このままだと君は月の世界に帰れなくなってしまふんだなあ。ウサギさん、何か僕にできることがあったらなんでも言ってほしいんだなあ」

「タヌキくん、キミは……」

用心深いウサギは、それでも自分の感情を気取られないように苦心していました。

……なんだ、こいつ、なんなんだ！なんで、そこまでまっすぐになれるんだ！なんで、人間なんかのために！

ウサギは生まれてはじめて、嫉妬しました——自分よりも優れた存在、美しい存在、神々しい存在に。

……お前は、俺を苦しめるために生まれてきたのかい？人間のためにボクを一人きりにする気なのかい？お前はボクを……ボクを滅茶苦茶にするために生まれてきたのかい？

白いウサギは息を殺し、目を真っ赤にして泣いていました。

愚鈍なタヌキにはわかりませんでした——白いウサギが何を悲しんでいるのか？

愚鈍なタヌキは知りませんでした——人が涙を流すのは悲しい時だけではないことを。

「ウサギさん？どうしたんだい？何がそんなに悲しいの？僕、どうすればいいんだい？」

愚鈍なタヌキはウサギに聞きました。なぜならタヌキにはそれ以外に白いウサギの涙のわけを知る術がなかったからです。

「タヌキくん……キミはなんて優しいんだい？」

……ボクは絶対に許さない

「今日は、これで、失礼するよ……そう、また明日、このくらいの時間にキミに会いに来る。」

……お前は、お前は、俺を狂わせようというのか？

「だから、ぜったいに無茶はいけないよ。人間に気を許してはいけない。いいいね？」

……お前なんか、人間に喰われちまえばいい

白いウサギは真っ赤に充血した目でタヌキを見つめました。愚鈍なタヌキにはそう見えました。

「わかったよ、約束する。だかたウサギさんも、もう、泣かないでほしいんだなあ」
……ウサギさん、大丈夫なんだなあ、おじいさんも、おばあさんもとってもいい人なんだなあ。

「ああ、わかった……じゃあ、さようなら」
……泣いてなんかない、オレは泣いてなんかないぞ！

白いウサギはそういい残して、山の中に帰っていきました。それはまるで稲光のような速さでした。

「ウサギさん、カッコいいんだなあ、早いんだなあ、素敵なんだなあ」
愚鈍なタヌキは白いウサギの後姿を、ただただ見つめていました。

「畜生！畜生！畜生！」

「あんなヤツ……あんなヤツーツ！」

赤眼のウサギは、そう叫びながらものすごい速さで野山を駆け回りました。

「認めない。認めるものかよ！」

白いウサギの心の叫びがカチカチ山の漆黒の闇に木魂し、狂気の渦となって全てを飲み込んでいきました。もう、白いウサギには自分を止める術はありませんでした。

狂気の月

狂気のウサギは赤い目を爛々と輝かせながら野山を駆け巡りました。その有様はまるで二対のどす黒い鬼火が闇夜に漂うようでした。木々を避け、岩を飛び越え、やがてその禍々しい炎は、白いウサギが愚鈍なタヌキと出会ったあの大きな岩のある、開けた場所にたどり着きました。

「ハア、ハア、ハア……チクショウ……チクショウ……」

息を切らし、酸素が足りなくなった白いウサギの両目の炎は、青白く、そして弱々しくなっていました。

薄れてゆく意識の中で、ウサギが目にしたもの。それは上弦の月でした。

「ハアハア……ハハハッ……クックウクックウ」

愚鈍なタヌキはこの場所から月に語りかけていましたが、狂気のウサギには、上弦の月に語りかけるべきものは、何も思い浮かびませんでした。あるのは怒号と誹謗と中傷でした。

「俺の月は欠けている。見事に欠けている。俺の月は……ヤツとは違う」

もしもそこに満月があったのなら、ウサギは正気でいられたのでしょうか。それはウサギにもわかりません。でも、ウサギの見たものは、まるでウサギの首がはねられ、夜空にさらされているような上弦の月でした。

その禍々しい光は、ウサギの狂気を昇天させました。

嗚呼、何もかも壊したい

嗚呼、滅茶苦茶にしてやりたい

どうせ満たされはしないのだから——この月のように

狂おしい

思いにまかせ

駆け抜ける

見上げてみれば

上弦の月

ウサギは泣いていました。

——ウサギは笑っていました。

ウサギは憎んでいました。

——ウサギは焦がれていました。

ウサギは沈んでいました。

——ウサギは昇天しました。

ウサギは消えそうでした。

——ウサギは燃えてました。

ウサギは白でした。

——ウサギは赤でした。

ウサギは欠けていました。

——ウサギは満ちてきました。

ウサギは狂喜しました。

——ウサギは狂気しました。

そしてついに——ウサギは凶器になりました。

景色

夜が明けて、狂気のウサギはおじいさんの家の見える茂みの中で、じっとタヌキの様子を伺っていました。ウサギの目には昨日と変わらない風景が写っていましたが、ウサギの目は赤かったので、すべてが憎悪の対象に見えていました。

「あんな畑は滅茶苦茶にしてやる」

お昼になると、おばあさんが家から出てきました。おばあさんはお昼の支度をした際にでた残飯をタヌキに与えていました。おばあさんはたいそうタヌキを可愛がっています。

「タヌキくん、そんなに人間がいいのかい」

ですが、ウサギはちっとも寂しくありませんでした。なぜならウサギの心は欠けていたからです。

「・・・いいよ、いい、そうやって可愛がってあげればいい・・・愛情が深ければ深いほど・・・クックックッ、ケッケッケッ」

そこにおじいさんがやってきて名にやら楽しげに話しています。

タヌキはとっても幸せそうでした。

おじいさんは楽しそうでした。

おばあさんはうれしそうでした。

ですが、ウサギはちっとも羨ましいと思いませんでした。なぜならウサギの心は満たされていたからです。

「何もかもだ。何もかも奪ってやる。そして、すべては満たされる……すべてを黒く塗りつぶす」

ウサギはなんだかちっともうれしくなりました。

キミの幸せはボクの幸せ、ボクの悲しみはボクだけのもの

キミの幸せが大きければ大きいほど、僕の悲しみも大きくなる

ボクはもう、満たされた。

だからキミももう満たされただろう？

キミの大好きな満月のように

でもね、月はだんだん欠けていき、やがてなくなってしまふんだよ

真っ黒に染まって、闇に解けていくんだ

それはとっても素敵な気分なんだ

ボクは思わず踊りたくなって闇の中を飛び回る

息が切れるほど跳び回る

ウサギはととてもとてもうれしくなったので、居ても立っても居られなくなりました。

「……嗚呼、ボクは自分を抑えきれないよ……嗚呼、早く壊したい。何もかも、何もかも……」

ウサギは我慢できなくなり、闇の中に踊るように消えていきました。

ウサギは息が切れるまで野山を駆け巡りました。

ウサギの表情は恍惚に悶えていました。

夜、おじいさんとおばあさんはいつものように囲炉裏を囲み夕飯を食べていました。
「ありがたや、ありがたや、こうしてご飯が食べられるのは、おじいさんのおかげですよ」
「なんも、そんなあこたーねー、ワシらがこうして食べていけるのも山の神様のおかげじゃて。
ワシら二人が食べていくのには、まあ、まあ、こまるこたあ、ねえからよ」
「うんだなあ、時折川の魚や山菜が届けられるのも、山の神様のおかげにちげえねえ」
「ばあさんや、オラ前によ、そりやー見事な白いウサギを見たことがある。ありゃー、まちがいねえ、山の神様のお使いだべ」

おばあさんはすぐには応えませんでした。おばあさんは囲炉裏の火の様子を見ながらピバサミで薪をはさみながら言いました。

「わたしゃ、てっきり、あのタヌキの仕業かと思っていましたよ」
「あー、なんでえ、あんなイタズラタヌキが、山の神様の使いなわけなかんべよー」
おじいさんは笑いながら言いました。

「まあ、あのイタズラっ子が、鍋にして食っちゃろーと思ったけんどよ」
おばあさんはおじいさんの顔を覗き込むようにして言いました。
「おじいさんもすっかり、タヌキがめんこくなってるもんなあ」
「かっかっかっかっ、そう言うばあさんが一番めんこいと思っているじゃろーに」

おばあさんは少し遠くを見るような目で言いました。
「ワシらもとうとう子供さ、授からなかったからよー、きっと山の神様が寂しくねーよーにって、あのイタズラ坊主をよこしてくれたんじゃねーかと、そんな風に考えたんよ」

おじいさんはそっとおばあさんの手を握りながら言いました。
「そーゆーことも、あるかもしんねーなあ」

見詰め合う二人の目には、わずかながら潤んでいるようでした。

誰の上にも同じように時は流れます。おじいさんにも、おばあさんにも、二人に可愛がられる愚鈍なタヌキにもただひとり、狂気のウサギだけは、どこか歪んだ時間の中に迷い込んでしまったようでした。

「さてさて、ゴンタもお腹空かして待ってるから」
そう言っておばあさんは、自分が食べ残しと料理の残飯を別の入れ物に移しました。
「あー、なんじゃい、ゴンタって？」
「あら、いつまでも名無しのごんべいじゃこまるでしょ」
おばあさんはうれしそうに、そしてどこか恥ずかしそうにしながら、ゴンタの餌を持って立ち

上がろうとしました。が、まだ、足が痛むので、少しよろけてしまいました。

「これこれ、無理するんじゃないかねー」

「すみません、大丈夫ですよ、こうして、少しでも動こうと思えるのは、あの子のおかげなんですから」

おじいさんはおばあさんを支えて、一緒にゴンタのところに行きました。おじいさんは少し不満でした。なぜならおじいさんはおばあさんに内緒でイタズラタヌキのことを「タヌ吉」と呼んでいたからです。

ゴンタ

「ふん、いつもどおりだな」

おじさんの家を遠くの茂みから狂気のウサギがみえています。

「まったくあの二人、どういうつもりなのか」

ウサギにしてみれば、それはあまりに意外な出来事でした。人間に捕まったウサギの仲間は、ほとんどその日のうちに皮をはがれ、無残な姿でばらばらにされ、人間の食料として食べられてしまいます。

そしてそれは、ウサギに限ったことではありません。

「くっ、くっ、くっ……人間、自分だけが常に食べられる側だと思うなよ」

人間がタヌキを捕まえた場合は、まず皮をはいで毛皮にし、残った肉は狸汁にして数日の間に食べてしまいます。しかし、どうやらこの老夫婦はタヌキをすぐには食べるつもりはないようでした。ウサギはどうしても気になって、おじいさんとおばあさんの声が聞こえるところまで忍び寄りました。

「ゴンタ、ほれ、食べー」

「おー、おー、おー、そんなに腹をすかしていたかあ」

「めんこいの一、ほんに、めんこいの一」

おじいさんとおばさんはまるで自分の子供か孫のように狸を可愛がっていました。

「ゴ、ゴンタだって！なんだよそれ……それって『名前』ってやつか！」

冷酷なウサギもさすがに驚きを隠せませんでした。

「まるで……まるで人間みたいに」

ウサギの全身の毛は逆立ち、両目は真っ赤に染め上がりました。

「……そうかい、そうやって遊んでいるのかい——そういうことか。タヌキめ、なんて抜け目のないヤツなんだ。お前はいつも……いつもそうやってオレのことを……」

ウサギは恨みました。それは人間のおじいさんでもなく、おばあさんでもなく、そして狸でもありません。

ウサギは『愚鈍なタヌキ』を恨みました。

愚鈍なタヌキを可愛がる『あの老夫婦』を恨みました。

そしてこのような場所に迷い込んだ己の不幸を呪いました。

愚鈍なタヌキに気を許した己自身を呪いました。

ウサギの中で満たされた何かがあふれ出しました。

ウサギの中で欠けていた何か壊れました。

ウサギは白く、そして赤く、かつ黒くなりました。

「……ゴンタ、いいよ、ゴンタか。いい名前だよ……そうかい、キミはゴンタなんだね」

ウサギの中で愚鈍なタヌキは狸ではなくゴンタになりました

ウサギの中の狸は消えました

ウサギの中の愚鈍なタヌキは消えました

「……キミが居ない世界はとてもさみしいよ。でもね、キミは本当は最初からいやしなかったのさ。キミは『愚鈍なタヌキ』なんかじゃなく、最初から『ゴンタ』だったのさ」

わずかばかり残っていた白いウサギの中の大事なものは壊れてしまいました。

壊れた破片はウサギの中からあふれ出たものによって流されてしまいました。

今夜は月は見えません。

月はあまりにウサギが恐ろしかったので、雲の向こうに隠れてしまったようでした。

名前

おじいさんとおばあさんは愚鈍なタヌキに「権汰」と名づけました。
だから愚鈍なタヌキは権汰になりました。

「おじいさんおばあさんありがとう。僕に名前をつけてくれえて」
権汰はとてもうれしく思いました。
「ゴンタ、僕はゴンタなんだなあ」

「僕」であった愚鈍なタヌキは「権汰」という名によって「僕」から解放されました。
「『ゴンタ』はもう『僕』じゃないんだなあ」
名をつけられた愚鈍なタヌキは、おじいさんとおばあさんの「権汰」になりました。

権汰はとてとてもうれしく思いましたが、とてとても心配になりました。
「ウサギさんは、君は、一人ぼっちになっちゃったんだなあ」
「綱」によっておじいさんに縛りつけられていた愚鈍なタヌキは「名」によっておじいさんとおばあさんの「権汰」として、この畑に縛りつけられました。

「ウサギさん、ゴンタには何もしてあげられないんだなあ」
権汰が見上げた夜空には月の姿はありませんでした。
月はあまりに権汰が羨ましかったので、雲の陰に隠れてしまったようでした。

「お月様、どうかウサギさんを独りぼっちにさせないで欲しいんだなあ」

きゅー、きゅー。
権汰は泣きました。
うれしかったからでもなく、さみしかったからでもなく、ただただ、白いウサギのことを考えると悲しくなってしまったのです。

そんな思いをよそに、分厚い雲が夜空に流れ、闇を覆います。闇はより一層深まり、生暖かい風が権汰の鼻を湿らせます。
「明日は雨になるんだなあ」

月隠れ
流れる雲の
隙間から
かすかに見える
君の面影

雨

その日は朝から激しい雨が降っていました。おじいさんは畑の様子を見てから権汰を家の前の軒先につなぎなおしました。ここなら雨には濡れないですみます。

臆病なタヌキは最初、おじいさんが何をしようとしているのかわかりませんでした。もしかしたら、このまま皮をはがれてしまうかもしれないと怯えましたが、おじいさんの優しい目を見てすぐにそうではないとわかりました。

「ボクなんかのためにありがたいんだなあ」

臆病なタヌキは自分が権汰であることに感謝しました。

「どうかウサギさんが冷たい雨に濡れませんかように」

権汰は山のほうを見ながら、ただただ白いウサギのことを思いました。

「いいよ……いいねえ、キミ」

取残されたウサギは、遠くからその様子を眺めていました。

「ボクはもう、こんなにびしょ濡れなのに……クックックッ」

あまりに激しい雨は、泥水を跳ね上げてウサギの白い毛を土色に染めていきます。

「ボクはもう、こんなに汚れてしまっている」

そう言いながらも、狂気のウサギの目は笑うとも、睨むとも、見つめるとでもない、何かうつろで冷淡で生暖かい視線を、じっと送り続けました——じっと、じっと、じっと、じっと、じっと、自分を置き去りにしたモノたちに向けて……

禍々しい空気が狂喜のウサギの周りを取り囲み、あたりの景色を歪んで見せていました。カチカチ山の空は、凶器になったウサギに恐れおののき、泣いているようでした。やがて雨はいつそう激しく降り始め、大粒の雨が草木を叩きつけ、大地を削っていくようでした。白いウサギの姿は雨の中に溶け込み、やがて姿が見えなくなるかと思うほどに気配が消えていきました。

ただ、ウサギの赤い目だけが、禍々しい鬼火のように浮かんでいるようでした。

雨上がりの夜空に

その日の夜――

昼間降った雨はやみ、静寂が闇を支配していました。権汰はおじいさんとおばあさんの家の軒先に繋がれたまま、夜空を眺めていました。雲ひとつない空は、たくさんの星が瞬き、それはまるで星と星がなにかひそひそ話しをしているように見えました。

「……今日はお月様はいるけどウサギさんはいないんだなあ」

瞬く星空の中に、宵月が浮かんでいる。

満月まではあと5日ほど。

そしたら、まん丸に輝くお月様に、ウサギさんが飛び跳ねる。

宵月はウサギの姿が胸の辺りまでしか見えません。

「……ウサギさん、今頃どうしているのかなあ」

権汰は考えました。やさしいおじいさんとおばあさんなら、きっと白いウサギと一緒に暮らしてくれるにちがいない。それはどんなに素敵なことだろうと……

「ウサギさんが今度来たら、そのことをはなしてみるんだなあ。そして、きっと、おじいさんとおばあさんは素敵な名前をくれるんだなあ……ああ、どんな名前だろう。」

く――ん、く――ん。

権汰は泣きました。満月の夜が待ち遠しくて、夜空に向かって泣いていたあの頃のように。まだ愚鈍なタヌキだった頃のように。

「なんて情けない声なんだい」

不意に物陰から声がしました。その声はよく聞き覚えのある声――権汰が間違えるはずはありません。それは大好きな、大好きな白いウサギの声でした。

「あー、ウサギさん、ひどい土砂降りだったから、心配していたんだなあ」

権汰はうれしさのあまりに、目に涙を浮かべていました。

「隠れていないで、姿を見せて欲しいんだなあ」

権汰は懇願しましたが、ウサギは姿を現そうとはしませんでした。

「キミは元気そうだね・・・えーと、ゴンタっていったかな」

愚鈍な権汰には、ウサギの居る場所がわかりませんでした。なぜなら狡猾なウサギは、話をするたびにすばやく移動し、ウサギがどこにいるか愚鈍なタヌキにかわからないようにしていたからです。

「ウサギさんは大丈夫なのかなあ？」

愚鈍なタヌキは、白いウサギの姿を探して、あちこち覗くようにうろうろしましたが、縄につながれているので、思うように回りを見ることができません。

「いいかい、キミ、よく聞くんだ。じっとして、静かにね」

狡猾なウサギは、ささやくように、諭すように、誘うように話しかけます。

「もう少ししたら満月だよね」

また、違うところから声がします。

「満月になったら、キミを迎えに来る。だからそれまで、おとなしくしているんだ。」

「ええと、ウサギさん。それ、どうゆうことかわからないんだなあ。迎えに来るってどういうことなのかなあ？」

「しー、黙って、しゃべらないで。いいかい。ボクはキミを助けたいんだ。だけどいろいろと準備が必要だね。それよりキミ、人に化けたりできるのかい？」

愚鈍な権汰は考えました。

「できるけど、今は無理なんだなあ、いろいろと必要なものがあるんだなあ」

「どんなものが必要なんだい？」

「えーっと、それは――」

愚鈍なタヌキの右側でささやいていたウサギの声は、今度はすぐ後ろから声が聞こえました。

「そのまま、動かないで。じゃあそれがあれば、キミは化けられるんだね……たとえばボクを人間――たとえばおじいさんやおばあさんに化けさせることもできるのかな？」

一瞬権汰はゾクっとしました。それは野生の警戒心のようなもの――まるで、肉食の獣に背後から襲われるような感覚。だけど、後ろに居るのは白いウサギさんのはずでした。

「あ、あああ、あのお……そういうことも、できるんだなあ」

「よろしい。じゃあ、詳しく聞かせてくれるかな……振り向かないで」

約束

「――そうかい。じゃあ、満月の夜でいいね」

白いウサギは、権汰の首筋がむずがゆくなるような甘く、湿った声で言いました。

「それまでに、キミは必要なものをそろえられるかい？」

愚鈍なタヌキが答える前に狡猾なウサギは付け加えました。

「いや、ちがうなあ。これは絶対にやらしてもらわなければならない……でない」と――」

まるで空気が流れが一瞬凍りつくような静寂のあと白いウサギは続けました。

「でないよ、ボクはもう、生きてはいけないよ」

「う、ウサギさん、やっぱり、僕がおじいさんの野菜を採ってこれなくなったから、や、やっぱり、何も食べてなかったのかい？」

権汰はとても恐ろしく思いました。

白いウサギが食べられなくなったのは自分の責任。

そして生きていけなくなるのも自分の責任。

権汰はとても幸せなのに、おじいさんとおじいさんに愛されているのに……

「う、うさぎさん、ぼ、僕は……心配しないで、必ず用意するんだなあ」

「そうかい、そうしてくれるとうれしいよ……だってボクには、キ・ミ・し・か……いないんだよ」

君しかいない――「なんて素敵な言葉なんだろう」と感激し、権汰は鳥肌を立てました。しかし実は狸の身体は、ウサギの声の禍々しさに恐れおののき、悲鳴をあげているということに、愚鈍なタヌキは気付きませんでした。

「じゃあ、5日後、満月の夜にまた来るよ。じゃあ……約束したからね」

白いウサギはそう言い残して、スーッと姿を消したようでした。

それまでの張り詰めたような空気が急に軽くなり、夜風が遠くの虫の鳴く声を運んできます。

「あー、全部僕がいけないんだなあ、ウサギさんの姿を満月まで見られないのは、僕がウサギさんを一人きりにしたせいなんだなあ」

きゅーん、きゅーん

愚鈍なタヌキは闇夜に鳴きました。

権汰が空を見上げると、そこには月が弱々しく浮かんでいました。

そこにウサギの姿はありませんでした。

「あぶない、あぶない、危うく――」

白いウサギは、まるで稲光のような速さで山を登っていきました。

「危うく、本音が出そうになった……あの馬鹿が！なにが僕のせいだ！」

狂気のウサギは、激しい怒りに満たされていました。

アイツはなんにもわかってない……わかってない……わかってない！」

白いウサギは今の自分の姿を愚鈍なタヌキに見せるのがイヤでした。自分でもわかるくらい禍々しい光を放つ赤い目は、「決してその者を信じてはいけない」と思わせるに十分なものでした。「少しばかり感がいいやつなら、すぐに気付くだらうが……もっともあの馬鹿なら気付かないだらう」

そして、たとえ、気付いたとしても……

だからこそ、白いウサギは腹立たしかった

だからこそ、白いウサギは姿を隠した

だけど、それだけ？ だけど、それだけ？

「えーい、うるさい、うるさい、うるさい！」

狂気のウサギは自分の心の中から問いかけてくる声を一蹴しました。

「俺は狂わされたんじゃない！ 自ら狂ったんだ！」

だけど、それだけ？ だけど、それだけ？

「キー！ キー！ キー！ きこえねーよー！」

耳をふさごうにも、ウサギの耳はあまりにも大きく、ウサギの前足はあまりにも短すぎました。

「キー！ キー！ キー！ きこえねーよー！」

ウサギは大きな声で叫ぼうとしましたが、ウサギの口は叫ぶのには余りに小さく、ウサギの耳をさえぎることはできませんでした。

「俺はあー、俺様が……なんでタヌキなんかに……なんでカメなんかに！」

ウサギの脳裏には、カメに負けたあの日のこと、そしてタヌキに出し抜かれたあの日のことが、走馬灯のように蘇ります。

ですがウサギの目は赤かったので、過去の記憶が真っ赤に染まってみえました。

それはまるで……

「まるで血の雨が降ったようだー！血の雨ー！」

ふと白いウサギは足を止めました。

狂気のウサギが夜空を見上げると、そこには愚鈍なタヌキが見上げたのと同じ月がありました。
。

「クッククックッ……今夜も月は真っ赤だなあ！ゴ・ン・タ……お前の月も真っ赤に染めてやる」

白いウサギは大きな声で叫びました。

ウサギの叫びはあまりに暗かったので、闇に解けてしまいました。

わらじ

昨日の雨が嘘のように晴れた次の日の朝のこと。

おじいさんが畑仕事をしようと、土間まで行くと、昨日まで履いていたわらじがなくなっていました。

「ばあさんや、ここに置いてあったわらじ、知らんかの？」

「いやー、さーて、どーしたかなあ？」

「しかたねえーなあ、いたずらネズミにでも、もってかれたかなあ」

「ほーれ、新しいのさ持っていけえ」

「あー、そーだなあ」

あたりをいくら探しても見つからなかったので、おじいさんは仕方がないのでおばあさんに新しいわらじを用意してもらうことにしました。おじいさんは不思議に思いましたが、新しいわらじを履いて外に出るといつものように権汰に声をかけました。

「権汰は寝坊助じゃのおー、夜中さおきて、お月様でも眺めめてたかあ？」

おじいさんの声に一瞬ドキッとしましたが、権汰は耳だけ動かして寝たフリを決めました。

「かっかっかっ、呑気じゃのおー、権汰は」

おじいさんはニコニコしながら畑のほうへ向かっていきました。

おじいさんの足音が遠のくと、権汰はそうっと、薄目を開けておじいさんの後姿を確認しました。

「ごめんなさいなんだなあ、おじいさん……」

おじいさんのわらじを盗み出しのは権汰でした。

昨日の夜、ウサギが姿を消した後、自分で縄を噛み切り、家の中にこっそり入っておじいさんのわらじをくわえて外に出ると、軒先に穴を掘ってそこにわらじを隠したのです。ですから、権汰の眠っているお腹の下には、穴を掘った跡があり、それをおじいさんに見つからないよう覆いかぶさるように寝たフリをしていたのです。

「これさえあれば、たぶんうまくいくんだなあ」

おじいさんの姿が見えなくなると、権汰は穴を掘っておじいさんの使い古したわらじを通りだして、その上にちょこんと座りました。

『ひょい！』

権汰が鼻先で前足を交差させるようなしぐさをすると、次の瞬間、狸の姿は見る見るうちにおじいさんの姿に変わっていきました。

『ひょい！ひょい！』

権汰は、おじいさんとそっくりな——というよりはおじいさんの生き写し、『軒先につながれたおじいさん』になりました。

「さて、さて、どうかの……まずまずじゃなあ」

『軒先につながれたおじいさん』は、首に結び付けてある縄を解き、かわりに権汰が盗み出したおじいさんの使い古したわらじをしっかりと足に結び付けました。

「うん、うん」といいながらおじいさん或いは権汰は、自分の身なりを一通り確認しながら考え込みました——うーん、問題はこれからなんだなあ。

「さて、ばあさんをうまいことごまかせるものかのお」もう一度身なりを確認しながら、申し訳ない気持ちで一杯になりました——おばあさん、ごめんなさいなんだなあ。

針と糸

おじいさん或いは権汰は、家の扉の隙間から家の中を覗いてみました。おばあさんは家の中でなにやら縫い物をしているようでした――なるほど、おばあさんはいつもあれを使っているんだなあ。

おじいさん或いは権汰は、戸口に立ち、顔だけ家の中を覗く様にして、おばあさんを呼びました。

「ばあさんや、すまんが、ちょっと畑まで来て手伝ってくれんかのお」

「あー、ちょっとまっとくれ、今すぐいくからよー」

「あー、じゃあ、先にいっとるから」

そういうとおじいさん或いは権汰は、戸を閉めると両手をパン！と叩いて、あっという間にもとのタヌキの姿に戻りました。権汰は急いで軒先に戻り、何食わぬ顔でタヌキ寝入りを始めました。少しするとおばあさんが、扉を開けて出てきました。

「ちょっくら、畑までいってくっからなあ」

先ほどまでおじいさんの姿をしていた権汰に向かってそういうと、おばあさんはおじいさんの畑のほうに歩いていきました。権汰はおばあさんの姿が見えなくなるとすばやくおじいさんの姿に変身し、家の中に入りました。

「えーっと、どれどれ、うん、これじゃこれじゃ」

おじいさん或いは権汰は、先ほどまでおばあさんが使っていた針と糸を見つけると、急いでそれを取り出して、予め用意していた木の葉に針と糸を通しました。

「これで、ばあさんにも化けられる」

おじいさん或いは権汰は、外に出ると軒先の小石の下にその針と糸を通した木の葉を隠し、すばやく縄を首にくくり付ける両手をポン！と叩いてもとの姿に戻りました。

「ふー、これで後は満月を待てばいいんだなあ」

しばらくすると、おばあさんが畑から戻ってきました。

「おかしいのお、確かにおじいさんの声がしたと思ったんだがのお」

そうつぶやきながらおばあさんは家の中に入り、また縫い物を始めようとしていましたが、先ほどまで使っていた針と糸が見つかりません。

「なんだかなあ、狐か狸に化かされたみたいじゃなあ……」

一瞬おばあさんは権汰がいたずらしたのではと思いましたが、「もっとも、権汰にはそんなことできねーだろうけどなあ」とブツブツといいながら、別の針と糸で縫い物を始めました。

夜になると、おじいさんとおばあさんは「不思議なこともあるもんじゃのお」と、今朝のことを話しましたが、二人とも権汰の仕業だとは思いませんでした。なぜならおじいさんとおばあさんにとっても権汰は愚鈍な狸だったからです。

おじいさんとおばあさんが寝静まった後、権汰は隠してあった針と糸を通してある木の葉を取り出し、自分の頭の上に置きました。おじいさんになったときと同じように目足を鼻先で交差させると見る見るうちにおばあさんの姿に変身しました。

「さてさて、まあ、こんなもんかねえ」

『軒先につながれたおばあさん』は『軒先につながれたおじいさん』がそうだったように身なりを一通り見直してうなずきました。

「よしよし、これならきっとおじいさんもわからんじゃろうなあ」そういいながらも、やっぱり権汰は申し訳ない気持ちで一杯になりました——おじいさん、おばあさん、ごめんなさいなんだあ

パン！とおばあさん或いは権汰が両手を合わせると、みるみるうちに元の権汰の姿に戻っていきます。

「これを使えばウサギさんで、もおじいさんとおばあさんに化けられるんだなあ」

そう思いながら権汰は昨日の夜のことを思い浮かべ、身震いをしていました。

『満月の夜にまた来るよ。じゃあ……約束したからね』

「ウサギさん、僕を心配してくれてたんだなあ……うれしいんだなあ、でもおじいさんとおばあさんをだますのはいやなんだなあ」

愚鈍なタヌキは気付いていませんでした。自分が震えていたのは、白いウサギの好意を感じたからでもなければ、おじいさんとおばあさんをだますことへの罪悪感でもありませんでした。その感覚は、狸が天敵の犬やイヌワシなどに襲われそうになったときに感じるザワザワとした嫌な感覚と同じだということを……そして、今まさにこの瞬間、肉食獣が獲物を狙うときの、冷酷で貪欲で狡猾で執拗な視線が、愚鈍なタヌキに向けられていることを。

「クックックックッ……あいつ、なかなか仕事が速いじゃないかあ、やればできる子なのかなあ、いつもはノロマなフリをして、俺様のことをあざ笑ってたんじゃないのか？」

狂気のウサギは、飢えた獣のように口から唾液を流しながら卑屈な笑みを浮かべます。

「ケッケッケッケッ……いいさ、いいさ、お前たち狸は、いつもそうやって遊んでいるんだろう。今のうちに楽しんでおきなよ」

狂気のウサギは空を見上げました。

「……あと4日で満月だあああ」

狂気のウサギの禍々しさは、冷酷や貪欲、狡猾といった言葉では表現できないような、それはそれは恐ろしいものでした。狂気のウサギの影は、月が満ちていくにしたがって、どんどん、どんどん深く、暗くなっていくようでした。

愚鈍なタヌキ、或いは権汰には
夜空に浮かぶ、少しだけ欠けた月の中に
満月が待ち遠しくて踊り跳ねるような
愛しい人の姿が見えました

狡猾なウサギ、或いは狂気のウサギには
夜空に浮かぶ、満たされない月の中に
満月が待ち遠しくて踊り狂っているような
獣の姿が見えました

月の出

月は満ちました。まだ陽は完全に暮れてはいません。白いまんまるの月が東の岡の方から顔を出しました。狡猾なウサギは愚鈍なタヌキと出会った場所で、愚鈍なタヌキはおじいさんの軒先で、満月を眺めていました。

「ああ、ついにこの日が来た」

白いウサギ、或いは狂気のウサギは、全身の毛が逆立つような高揚感で包まれていました。

「ああ、お月様が顔を出したんだなあ」

愚鈍なタヌキは、或いは権汰は、自責と後悔の念に駆られ、恐れと不安でじっと身を震わせていました。

「ほー、今日はまた、え一月じゃのー」

おじいさんはそういいながら家の中に入っていました。やがて闇は深くなり……

「やー、キミ、準備はできているかい？」

白いウサギ、或いは狂気のウサギは、物音一つ立てずに愚鈍なタヌキの背後に立ち、ささやく様に声をかけました。

「あー、ウサギさん、ビックリしたんだなあ」

そういいながら振り返った権汰の後ろには、白いウサギが、立っていました。その立ち姿は、愚鈍なタヌキのお気に入りの場所で、初めて出会ったきよりも、さらに美しく、月の光に照らされて銀色に光っていました。

「ああ、ウサギさん」

権汰は思わず見とれてしまいました。ウサギは首を斜めにかしげながら愚鈍なタヌキに近づいてきました。

「頼んでいたもの、用意はできたのかい？」

白いウサギの美しい姿、そして頭の天辺から響くような美しく、滑らかで、まるで刃物のような言葉に一瞬権汰はゾクっとしました。

「ああ、大丈夫なんだなあ」

そういうと権汰は地面からおじいさんの使い古したわらじのはなおを取り出し、小石の下に隠しておいたおばあさんの裁縫の針と糸を縫いつけた木の葉を取り出しました。

「こっちがおじいさんに化けるときに足の指に挟むわらじのはなお、こっちがおばあさんに化け

るときに頭の上に載せる木の葉なんだなあ」

愚鈍なタヌキは、右手にはなお、左手に木の葉を持って白いウサギに見せました。

白いウサギ、或いは狡猾なウサギは、愚鈍なタヌキの顔をなめるように見回しながら、何かを確認しているようでした。

「それで、あと、キミの姿に変身する方法なんだが……」

「それはこれを使うんだなあ」

はなおと木の葉を白いウサギに手渡すと愚鈍なタヌキは首飾りのようなものを草むらから取り出しました。権汰の動作はあまりに鈍く、狡猾なウサギをイラつかせました。

「これを首にかけると僕の姿に化けられるんだなあ。ボクの姿に化けられないと、おじいさんとおばあさんにも化けられないんだなあ」

そうって、タヌキは紐のようなものに、丸い土の塊のようなものが着いた首飾りを白いウサギにそっと手渡しました。

「その首輪にはボクの念のようなものが込められているから……この結晶が壊れない限り効果はあるけど、壊れないように気をつけて欲しいんだなあ」

「わかった気をつけることにするよ。すごいね、タヌキ君、キミの化ける能力は相当なモンなんだね」

白いウサギ、或いは狡猾なウサギの口元は笑っていましたが、赤い目は少しも笑っていないようでした。

首飾り

「じゃあ、早速試してみようか」

そういうと、白いウサギ或いは狡猾なウサギは、愚鈍なタヌキが作った首輪を首にかけようと思いました——うん？くさい……なんだ？これは？

「ねえ、タヌキ君。この首飾りというか首輪についている、これは……一体全体なんでできているんだい？」

白いウサギは顔をしかめながら愚鈍なタヌキに尋ねました。

「ウ、ウサギさん……それはいえないんだな。というか知らないほうがいいんだなあ」

白いウサギは愚鈍ではなかったのに、それがすぐになんであるのかわかりました——お前は本当に？本当にわかってないのか！気付かなくて、無意識で、これほどまでの屈辱をオレ様に！

タヌキの化ける力を、他の者が利用するためには、タヌキにならなければなりません。愚鈍なタヌキは、いろんな方法を考えましたが、もっとも効果的で、そして確実な方法を選択しました。自らの能力を自ら排出したものに込めたのです。しかしそれは、白いウサギにとっては、享受できないものでした。

……なんで、オレ様が貴様の糞を！

赤い目のウサギは、『狡猾なウサギであろう』と必死に自分の中の何かを押しえつけようと思いました。そしてそれはどうやら成功したようでした——いい、キミはきいよ。どうしてボクをここまで高揚させてることが出来るんだい？すばらしいよ！

「タヌキ君、わかった。ボクはわかったから気にしないでくれたまえ」

愚鈍なタヌキは思わず身を震え上がらせました。そして、今すぐここから逃げ出したいという気分になったことを不思議に思いました。

自分はここから離れたくなかったはずでは？

自分はウサギさんと一緒に居たいはずでは？

自分はウサギさんの役に立ててうれしいはずでは？

しかし権汰は、愚鈍だったので、それ以上のことはわからないし、それ以上のことは気付きませんでした。白いウサギが狡猾であるように、権汰は愚鈍だったので。

狡猾の罪、愚鈍の罪

「あ、あとは決め事を吹き込むだけなんだなあ」
愚鈍なタヌキは、声を震わせながら言いました。

「決め事ってなんだい？」

「化けるときの決め事、ボクはこうすると……」

そういつて権汰は二本足で立ち、前足を鼻先の前で交差させました。すると権汰は見る見るうちにおじいさんの姿に変わりました。

「なるほど、どうやれば化けれるか、自分で決めないといけないわけだね」

おじいさん、或いは権汰は、白いウサギに向かってうなづくと、今度は両手をパンと叩いてみせます。すると今度は見る見るうちにものとタヌキの姿に戻りました。

「キミは両手を叩くことで、もとの姿にもどるように決めているんだね」

「そうなんだなあ、うん、それは合理的だ。ボクはそうだなあ、化けるときは……」

白いウサギは、前足で地面を掘るようなしぐさをしました。

「うん、これでいこう」

すると白いウサギの姿は見る見るうちにタヌキの姿に変わっていきました。

「それで、今度はおじいさん」

白いウサギ、或いは化けタヌキは、おじいさんのわらじのはなおを自分の足元に置くと地面を掘るようなしぐさを始めました。

「上手なんだなあ」

愚鈍なタヌキの目の前で、白いウサギは化けタヌキになり、そしておじいさんになりました。

「よしよし、じゃあ、縄を解いて……」

おじいさんの姿をした禍々しいものは、愚鈍なタヌキの縄を解いて、それを自分に括り付けました。禍々しいおじいさんはヒザをポン！と両手で叩きました。すると見る見るうちに禍々しいタヌキに変わりました。

「すごいね、キミは。さあ、これでもう安心だ。キミは自由になれるんだ」

禍々しいタヌキは愚鈍なタヌキに「早くこの場を去れ」という意味でそういったのですが、愚鈍なタヌキに通じるわけはありません。

あっ、しまった！オレ様としたことが——「キミ、早く逃げなよ。後はボクがうまくやるから」

権汰或いは狸は直感的に「その場から離れるのはイヤだ」と感じていたのですが、やはり愚鈍なタヌキはそのことに気がつきませんでした。

「わかったんだなあ。じゃあ、ウサギさん、僕、山に帰るんだなあ」

そういい残して愚鈍なタヌキは自分の住んでいた山へと帰って生きました。その後姿を、禍々しいタヌキが生暖かい視線で見つめていました。

「あー、キミは今までよく生き残れたね。世の中には危険な罠に満ち溢れているというのに……世の中には、キミの考えも及ばないような恐ろしいことがあるんだよ」

満月の月明かりは、狂おしいほどに光り輝き、狂気のウサギを高揚させました。

満月の月明かりは、焦がれる思いを映し出すように、愚鈍なタヌキを照らしていました。

「でもね、お月様、ウサギさんは本当に美しいんだよ」

次の日の朝、おじいさんは畑に出ると、目を疑いたくなるような光景が広がっていました。

「な、なんだね、こ、こりゃあ」

おじいさんはしばらく立ち尽くし、そして力なくその場に座り込んでしまいました。

「こりゃあ、いったい、誰のしわざかのお」

おじいさんの目にしたもの――それは滅茶苦茶に荒らされた畑の姿でした。よく見ると畑には獣の足跡がたくさんあります。

「こ、これは……まさか」

おじいさんは畑から急いで家に戻りました。軒先に繋がれた権汰を見ましたが、これといって変わった様子はありません

「ちゃんと、繋がれておるよなあ」

おじいさんが権汰の首に結ばれた縄を確認しようとしたその瞬間、権汰はおじいさんが差し出した右手の親指と人差し指の間に噛み付きました。

「うわわあ、いたいっ！いたいっ！権汰あ何するかあ！」

おじいさんが権汰をつないでいた縄をつかむと縄はスルスルっと権汰の首からすり抜けました。

「こ、こりゃあ？さては、おめーのしわざかあ！」

おじいさんはすばやく権汰を結び付けていた縄をつかみもう一度権汰の首に巻きつけました。と、そこへ騒ぎを聞いたおばあさんが家から出てきました。

「あらまあ、大変なこと！」

おばあさんは家に入ると、土間においてあった、つかえ棒を持ち出すと、急いでおじいさんのところへ戻りました。

「こらあ、離さねえか！」

おばあさんは思いっきり権汰の身体を叩きました。

すると権汰は今度はおばあさんめがけて身を構えました。

「この野郎！」

おじいさんは血だらけの手で権汰に飛び掛り、首に縄をかけました。

「おとなしくせんかい！」

くー！くー！

権汰は激しく抵抗しましたが、しっかりと縄が首に巻きつき、どうすることもできません。

「この恩知らずが！」

おじいさんはおばあさんの持っていたつかえ棒を奪い取ると、権汰に殴りかかろうとしました。

「お、おじいさん、やめてくださいな！」

「ばあさんや、あのイタズラ狸め！畑を、畑を……ゴホッ！ゴホッ！ゴホッ！」

「おじいさん、ともかく、傷の手当てを、血が……」

おじいさんはおばあさんに引き止められ、権汰を縛り付けたまま、一度家に戻りました。

「まったく、あのイタズラ狸、恩を仇で返しおって！」

「権汰が、あの権汰がこんなことをするなんて」

「あー、全くじゃあ、ばあさん、それより困ったことになったぞ」

「そんなにひどいんですか？」

「あー、ありゃ、食い荒らしたなんてもんじゃねえ」

「まあ、それじゃ食べるものが」

「あー、こうなりゃ、しかたねえ、権汰をしめて、皮を剥いで売りにださなきゃならねえ」

「まあ、でも、そんなこと」

「肉は狸汁にするばえー、荒らされた野菜は、そうでもしねーと食べねーさあ」

「しかたないですかねえ」

「ああ、しかたねえ」

縄を解く

傷の手当てを済ますと、おじいさんは荒らされた畑の様子を見に出かけました。おばあさんは権汰の様子が気になりましたが、あまり情をかけると辛くなるので、家の中に閉じこもっていました。

しばらくすると、外からおじいさんの声――「ばあさん、ばあさんやー」

しかしおじいさんは扉を開けて入ろうとはしません。不思議に思ったおばあさんは玄関を出て周りを見渡しました。するとどうでしょう。権汰が縛り付けられていた軒先に、おじいさんが縛り付けられているのではないですか。

「あら、まあまあ、こりゃああ、どーしたことかね」

おばあさんは驚いて、おじいさんのところに近づきました。

「ばあさん、してやられてワイ、あの狸、ワシを化かしおった」

おばあさんは慌てておじいさんを縛り付けている縄を解きました。

「まあまあ、いったい何があったんです！」

おばあさんはおじいさんを抱えるようにして家の中に入りました。

「大丈夫ですか？怪我はないですか？」

おばあさんは心配そうにおじいさんの身体をさすりました。

「縛り付けられたところ痛くないですか？」

そう言っておじいさんの手足を見ているうちに、おばあさんははっと気がつきました。

……さっき権汰に噛まれた手の傷がない。これはいったいどうしたことだろう？

「あー、何、もう大丈夫じゃよ」

そう言ったおじいさんの声は、禍々しく、そして決しておばあさんの知っているおじいさんの声色ではありませんでした。

「あ、あんた、おじいさんじゃないね。一体誰なんだい？」

おばあさんがそういった瞬間、おじいさん姿は見る見るうちに権汰の姿への変わりました。

「権汰なのかい？なんでこんなことを……お前本当にあの権汰なのかい？」

おばあさんには信じられませんでした。自分たちが可愛がっていた狸が、権汰が、こんなこと

をするはずがないと思ったのです。おじいさんは白いウサギが山の神様の使いだと言っていましたが、おばあさんは権汰が、魚や木の実や薬草を届けてくれていたと信じていました。

権汰の姿をした禍々しいもの。恐ろしい瘴気を発し、目は充血し、毛は逆立ち、口元からキバをむき出しにし、唾液が滴り落ちる――その唾液はものすごい熱を帯びているかのように湯気が沸き立ち、地面を溶かしてしまいそうでした。

「あんた何かに憑かれたのかい？」

おばあさんは後ずさりをしましたが、足が思うように動かないので、そこに倒れこんでしまいました。権汰の姿をした禍々しいものは、一歩、一歩、おばあさんの方に近づいていきます。

おばあさんは恐怖の中で、なんとかそこから逃げ出そうと必死で考えました。

大声を出そう――でも、出してもおじいさんの畑までは声は届きません。

走って逃げよう――でも、おばあさんは足が悪いので走れません。

今にも飛び掛ってきそうな狂気の狸。おばあさんの身のこなしでは飛び掛られたら身をかかわすことはできないでしょう。何か手につかむことができたなら、それで一度はやり過ごせるかもしれません。

何か、何か手にもてるもの……

おばあさんは狂気の狸を軽快しながらも、土間においてあるものを思い浮かべました。……杵ならもう少し下がったところに！

おばあさんは決心しました。

……これしかねえ

黒い穴

クッ、クッ、クッ、クッ、ケッ、ケッ、ケッ、ケエエィ

さあ、どうする、どうするね
声を出しても届かない
逃げ出すこともできない
よけることもできない
あとは、あれしかないよねえ

狂気の狸であるところの狡猾なウサギは、その狡猾さゆえに、全てを見通していました。あとは、どうなるかではなく、どうしたいかというだけで、結果は見えています。

クッ、クッ、クッ、クッ、ケッ、ケッ、ケッ、ケエエィ

あと少し、あと少しで手が届くかねえ
でも、そんなにうまくいくかねえ
そんない早くできるかねえ
強くできるかねえ

おばあさんの額には、今までに搔いたことのないような、身を凍らせるような冷たい汗が流れていました。

このままじゃ、このままじゃ、殺されるううう
どうか、お助けを、どうか御慈悲を、どうか、どうか……

おばあさんは少しずつ土間の壁際においてある杵と臼の所に向かって後ずさりをしていきました。

気付かれないようにしないと
でも、そんなにうまくできるかねえ
そんなに素早く動けるかねえ
思いっきりできるかねえ

おばあさんは必死でした。
とても、とても必死でした。
それは、それは必死でした。
必死になれば必死になるほど、それは必ず死ぬとわかりました。

もうだめかねえ
もう終わりかねえ
権汰に殺されるのかねえ

狡猾なウサギであるところの権汰のようなものは、確信していました。

もうだめなんだなあ
もう終わりなんだなあ
権汰に殺されるんだなあ

権汰のようなものであるところの狡猾なウサギは、狂気が狂喜に変わる狭間で満月を眺めていました。

月が満ちていくよ
ああ、なんて美しい
ああ、なんて狂おしい
僕の中で何かが満たされていく
ああ、なんて心地良い
ああ、なんて狂おしい

クゥー！キュー！

凶暴な獣は、外から見ていてもわかるくらいに昂揚していました。土間全体が、凶暴な獣が発する瘴気によって空気が淀み、時を刻む理すら近づけないような禍々しい闇、黒い穴のようでした。おばあさんはあまりの恐ろしさに、今まで出なかった声が決まるとなると喉を通り口のあたりからこぼれだしました。

ひいいい、ひいいい、ひいいい

しかし、音とゆう音は、黒い穴に吸い込まれてしまうかのように闇に溶け込み、空気を伝わる事ができないようでした。

あと少し、この左手の後ろ辺りにあるはずじゃ

おばあさんは死を覚悟しながらも、最後の最後まで、光に向けて手を伸ばそうとしましたーが、しかし、おばあさんが手にしたのは、杵ではありませんでした。

凶暴な獣

……ハズレタァ、ハズレタァ、ハズレタァァァァ

凶暴な獣は、ついに月が満ちたと思いました。おばあさんが手にしたのは、杵の横にある籠であり、その中には、おじいさんの畑で取れた野菜が入れてありました。

……さあ、終わりにしようか

おばあさんの目には、獣が笑ったように見えました。

……ああ、神様！

おばあさんは、手にしたものが思ったものと違ったとしても、次の行動を変えられるような余裕、或いは余地はありませんでした——なぜなら、おばあさんは必死だったからです。

おばあさんは、何か奇声を発しながら、手にしたものを思いっきり獣に向けて振り下ろそうとしましたが、それはできませんでした。変わりに野菜の入った籠が倒れ、中から、芋やらにんじんやらが獣の方に転がりました。

それは狡猾なウサギにとって、思いも寄らない事でした。とっさに俊敏なウサギは、転がってきた芋をよけて一步後ろに飛び退きました。

なんだよ、おい、せっかく月が満ちかけたのに、雲が出てきて邪魔しやがった！

おばあさんは、倒れた籠を抱え込み、身を守りました。

クッ、クッ、クッ、クッ、まあいい

狡猾なウサギは、ゆっくりとおばあさんの方へ詰め寄りました。ちょうど目の前に、にんじんが転がっていたので、それを口にくわえ、思いっきり噛み千切りました。

クッ、クッ、クッ、クッ、こんな風に、あんたも食いちぎられるんだよ

ひいいい！

おばあさんは悲鳴をあげました。

あんな風に食いちぎられしまうのかねえ

と、そのときでした。

カチカチッ、カチカチッ、カチカチッ……

凶暴な獣の首の辺りから、石と石がぶつかるような音がしました。

くっ……こんなときに！忌々しき念珠よ、忌々しき狸よ！

おばあさんはその音を聞いてはっと気がつきました。

「あんた、権汰じゃないね、あんたもしや、おじいさんの言っていた……」

正体を言い当てられた狡猾なウサギの化け術は、あっけなく解けてしまいました。

あのタヌキの姿でばあを噛み殺してこそその満月だったのに、これでは、オレ様の月は満ちぬ
！

どんなにウサギが凶暴になったところで、人一人を噛み殺すことはできません。

なんという禍々しい白

なんという禍々しい赤

おばあさんはあまりの白さ、あまりの赤さに目を奪われてしまい、相手がウサギであることに考えが及びませんでした。兎は兎——どんなに禍々しくても、どんなに凶暴でも、ただの白いウサギであり、ただの目の赤いウサギでした。しかし、一度恐怖で満たされた心の中には、そんな事を考える余裕などありはしませんでした。

伝えたいこと

愚鈍なタヌキには、恐ろしい事が起ころうとしていることを知る術はありませんでした。
「ウサギさんは言ってたんだなあ。「昼間は近づくな」って言ってたんだなあ」

満月の夜、白いウサギは愚鈍なタヌキに言いました。
「ボクは君の姿に化けて、おじいさんが作ってくれた畑の野菜を食べて暮らすよ。キミは今までどおりに、山の中で暮らすといい」
「でも、ボクはウサギさんのことが心配なんだなあ」
「心配してくれるのうれしいけど、キミ、一度ドジを踏んでいるだろう。だから、昼間は絶対に近づかないこと……いいね」
「わかったんだなあ、約束するんだなあ」

……でも、僕、どうしても気になるんだなあ。

愚鈍なタヌキは、白いウサギとの約束を守ろうとしましたが、白いウサギのことを考えれば考えるほど、足は自然とおじいさんの家のほうに向かっていきました。
「僕じゃないんだなあ。足が勝手に動くんだなあ」
あまりにもウサギの事が気になったので、愚鈍なタヌキは、すべて自分の足のせいにして、のろのろと山を降りていくのでした。

……それに、言い忘れていたことがあるんだなあ。伝えたいことがあるんだなあ。

愚鈍なタヌキは、自分の化け術は、正体を見破った者には効かないということを、白いウサギに伝えることを忘れていたことに気付きました。

「ウサギさんなら大丈夫だと思うけど、やっぱり早く伝えたほうがいいんだなあ」
そう思うと愚鈍なタヌキの足運びは少しばかり速くなりましたが、それはとても間に合いそうにありませんでした。なぜならこのときすでに、狡猾なウサギの化け術は、おばあさんによって見破られていたからです。

カチ、カチ、カチ……カチ、カチ、カチ……

あの古狸！こんな時にまで崇られる！なんて厄介な念珠

……それに、あのうすのろタヌキが、化け術にこんな盲点があるとは！

「ところでタヌキ君、この化け術の効果は、どのくらい持つのかい？」
「僕の作った首飾りは化ける為の道具で、一度化かされた人は、化かされているってことが気づかれなければ、ずっと化けた姿に見えるんだなあ」

「あと、僕の天敵、犬やイヌワシなんかには効果がないんだなあ」

「つまり、あのおじいさんとおばあさんを化かすことができたなら、ずっと効果は続くんだね」

「そうなんだなあ。満月のときが化かす効果が一番高く、新月のときは一番弱いんだなあ」

「わかったあ、じゅあ、満月が一番いいなんだね。このあたりには犬やイヌワシはめったにやっ
てこないから、その心配もない」

……多分あの首飾りは、また、カチカチ音をさせるんだなあ。だからウサギさんには音が出な
いようにしてもらわないといけないんだなあ

狡猾なウサギはタヌキの姿に化けたら、念珠も化けて見えなくなる。それで十分だと思ってい
ました。しかし、いくら姿が見えなくなっても、念珠の効果はなくなるわけではありません。

……ウサギさんのことだから大丈夫だと思うけど……だってウサギさんは僕よりもずっとずっ
と賢いんだなあ

愚鈍なタヌキが思っている以上に狡猾なウサギはずっと賢いのかも知れませんが、そのときウ
サギは狡猾なウサギではなく凶暴な獣でした。

「……狂喜に絆されて余計なことをしてしまった……さて、どうしたものか？」

凶暴な獣の化けの皮ははがれ、そこには一匹の白いウサギがいるだけでした。ですが、そのウ
サギは、白く、赤く、そして狡猾でした。

「……バレてしまったものはしかたがない、こうなれば、もっと、もっと……」

狡猾なウサギは、そのあとに続く語彙を知りませんでした。おそらくそれは――陰鬱で残酷で
背徳で執拗な狂喜に満ち溢れた行為――そしてそれらに対する恍惚、昂揚、欲情。

「……この位置からだと少し遠いか？」

邪（よこしま）な獣は、おばあさんの位置と、後ろの壁の位置、そして自分の跳躍力——たぶん今は普段よりももっと大きく飛び跳ねられるはず——をじっくりと見定めて、一歩、また一歩、おばあさんとの間合いを詰めていきました。

「……こ、殺されるう～あの化物が飛び掛ってきたらこの籠でなんとか押しつけて……そしてどうする？ああああ、おじいさん！おじいさんや！早く帰ってきておくれえ～」

おばあさんは、倒れた籠を前に構えました。これなら、この凶暴な獣が、前から襲い掛かってきてもなんとか身を守れそうでした。おばあさんはブルブルと震えながら両手で籠をしっかりと掴み、凶暴な獣がいつ飛び掛かってきても大丈夫なように身構えました。

おばあさんは必死でした。

おばあさんは必死だったのです。

おばあさんには白いウサギが凶暴な獣に見えました。しかし、白いウサギは凶暴なだけではなく、狡猾で邪でした。おばあさんは必死でしたが、おばあさん自身は狡猾でも邪でもなかったもので、白いウサギが何をしようとしているか、何を考えているのかはわかりませんでした。

でも、おばあさんには一つだけわかっていたことがあります——それは、自分が襲われるのではなく、殺されるのだということが……

邪な獣は足を止めました。一瞬の静寂、それは静かで寂しい様というよりは、押し殺された沈黙の時間でした。

「しゅ——」

——それは世の中のありとあらゆる調和の上でのた打ち回る不協和音

——それは邪な獣の口元からこぼれた瘴気によって奏でられた狂気の旋律

次の刹那————

「あいやああ」

おばあさんは叫びました。

邪な獣は、おばあさんの期待を裏切り、真横に飛び跳ね、そしておばあさんの耳元をものすごい速さで通り抜けました。驚いたおばあさんは首を引っ込め、頭を下げ、腰を曲げましたが、手

に持っていた籠が邪魔で、思ったような体勢——頭を地面すれすれまで下げて身を守る格好にはならず、籠に抱きつくような格好になってしまいました。

背後

「たんっ！」という音と一瞬の間のあとに

「ずだんっ！」という鈍い音

真上

おばあさんは目をつぶっているのに、そこには更なる闇が訪れました。

「ずだんっ！」

籠がおばあさんの胸を押し付けうまく呼吸ができません。でも、呼吸ができないのはそれだけではないのだと、おばあさんは気がつきました。

「ずだんっ！」

どうやら、何かが頭に当たったようです。

「ずしゃんっ！」

どうやら、どこかで水がこぼれたようです。

「ずしゃんっ！」

どうやらそれは、頭の上か、後ろか……

ああ、背筋がゾクツとして……

身体が震えている……

嗚呼、なぜだか目が開かない

薄れて行く意識の中で、おばあさんははっきりと目にしました。

薄れて行く意識の中にあるおばあさんを、おばあさんの右目が見上げていました。

それは

地面に落ちたおばあさんの眼球でした。

朝だというのに真っ赤な夕焼けの中に居るようでした。

権汰、疑ってごめんよ……堪忍してなあ

血塗られた杵

「当たったあ！当たったあ！当たったあ！グシャグシャ！グチャグチャ！ベチヨベチヨ！」

それはグシャグシャでした。

それはグチャグチャでした。

それはベチヨベチヨでした。

邪（よこしま）な獣は、今までに味わったことのない充実感の中に居ました。

「クッ、クッ、クッ、ケツ、ケツ、ケツ……」

こみ上げてくるの感情を上手に表現する方法が見つからず邪な獣は、ただただ、笑うしかありませんでした。

「なんで、なんで杵と臼があるんだよ……ケツ、ケツ、ケツ……」

邪な獣の手には、おじいさんとおばあさんが餅をつくのに使う杵が握られていました。

そして、その杵は……

おばあさんでベチヨベチヨでした。

「あー、あー、餅はもっとネバネバなんだけどなあ」

おばあさんの頭はグシャグシャで、おばあさんの頭の中はグチャグチャでした。

「たぶん、これで、うまくいくかな」

邪な獣は、まず狸に変わり、そして、おばあさんに、次におじいさんにかわりました。

「なるほど、正体がバレても、こうすればいいんじゃない、なるほどなるほど」

邪なおじいさんは、畑仕事に行ったおじいさんが帰ってくる前に、おばあさんの死体を片付けなければなりません。それは、それは、大変な作業でしたが、邪なおじいさんはそれが、楽しくて、楽しくて仕方ありませんでした。

「クッ、クッ、クッ、ケツ、ケツ、ケツ……」

邪な笑いをしながら、おじいさんは思い出していました。

「狸に奪われた杵で、狸の大事なものを叩き潰す」

邪なおじいさんは時々手を止めては、思い出し笑いをしていました。

「いくらワシでも、人間をかみ殺すなんてできやしなかったんだが……」

「あるんだよなあ、こんなところに杵が……クッ、クッ、クッ、ケッ、ケッ、ケッ……」

「あーなるのは、わかってたんじゃ、ばあさんが、身をかがめて、そしたら、あとはこいつを頭の上に叩き落すだけ……」

邪なおじいさん或いはカメに競争で敗れ、狸に大事な杵を奪われたウサギは、おばあさんの身体を切り刻みながら、時々手を止めては、苦々しい記憶の中のカメや、フクロウやカラス、そして狸に向かって話しかけました。

「どーれ、こんなもんでいいかのぉ」

おばあさんはすっかり五体バラバラにされていました。飛び散った肉片や血をふき取りましたが、杵にべっとりをついた血だけは、どんなにふき取っても、きれいになりませんでした。

「まあ、これくらいは、いいかのぉ」

そういうと、邪なおじいさんはものとウサギの姿に戻りました。

「さて、今度はあの愚鈍なタヌキを探さないで……」

狡猾なウサギ

「ど、どうしよう……」

白いウサギは邪な獣だったので、おばあさんを打ちのめすのに必死でした。必死だったので、愚鈍なタヌキが近づいたことに気がつきませんでした。愚鈍なタヌキは臆病なタヌキだったので、誰にも気付かれないように、おじいさんとおばあさんの家に近づいたのです。

おじいさんは畑で山ほど仕事がある。

あれだけ荒らしてきたのだ、夕方までは戻らないだろう。

権汰には昼間は近づくなとっている。

あいつは愚鈍だが愚直でもある。

約束は必ず守る。

狡猾なウサギは、絶対の自信がありましたが、やはりウサギにはわかっていなかったのです。どれだけ愚鈍なタヌキが白いウサギのことが心配で、どれだけウサギのことが好きだということ。

「ど、どうしよう……」

臆病なタヌキが見たものは、白いウサギが家を飛び出すところでした。

「もしかしたら、化け術が解けちゃったのかな」

臆病なタヌキは愚鈍だったので、自分が肝心なことを伝えなかったばかりに、白いウサギの化け術が見破られてしまったと思い込みました。そして、それはそのとおりだったのですが、愚鈍なタヌキは、家の様子よりも白いウサギのことが気になったので、白いウサギのあとを追いかけてきました。

「クゥー、キュー」

白いウサギの大きな耳に狸の鳴き声が、あらぬ方向から聞こえました。

「な、なんだと！」

白いウサギはあまりに意表を疲れたので、思わず身を草むらに伏せました。

「ウサギさーん、待っておくれー」とそう言った、そう言ったよな！誰が？誰がってアイツに決まっている……しかし、なんで？いや、それよりも、ヤツに見られたのか？

狡猾なウサギは、考えました。

この状況、この状況での整合性。

奴は見たのか？そんなはずはない！

もし見たのなら声などかけるものか！

ここは出方を見るか？

とりあえず怯えたフリ……それがもっとも対応ができる。

家から飛び出したこと、声をかけられてオレが驚いた様子……ここまではまず、見られているが、それより以前のこと——家の中でのことは見られてない可能性がある……否、高い。

狡猾なウサギは、愚鈍なタヌキだったらどうしただろうと考えました。

もし、家の中でのことを見られているのであれば、あののろまが、気配を消していられるわけがない。まず、その場からあわてて逃げるか、声を上げるか、或いは自分を止めに入るか……

いずれにしても狡猾なウサギは、愚鈍なタヌキをいくらでも言いくるめることができるという自信がありました。

「な、なんだ、タヌキ君じゃないか、脅かさないでくれよ」

そういいながら狡猾なウサギは、愚鈍なタヌキの顔を伺いました。狡猾なウサギの演技は、それほどのものではありませんでしたが、愚鈍なタヌキをだますには十分でした。

愚鈍なタヌキ

「ぼ、僕は、ウサギさんに言い忘れたことがあるんだなあ」

愚鈍なタヌキは申し訳なさそうな顔をしながら、白いウサギに言いました。

「ぼ、僕らの化け術には、じゃ、弱点があって、偽者だと気付かれると、化け術は解けちゃうんだなあ……で、も、もしかして、おじいさんか、おばあさんに気付かれちゃったのかなあ」

狡猾なウサギはとても悲しそうな顔をしました。

「おじいさんとおばあさんはボクを捕まえてタヌキ汁にして食べようとしたんだよ」

「え？そんなはずはないんだなあ、おじいさんとおばあさんは、とてもボクを可愛がってくれたんだなあ」

「それが、事情が変わったんだ。おじいさんの畑が、タベひどく荒らされたみたいでね……まさか、キミじゃないよねえ」

「そんな、とんでもないんだなあ、ぼ、僕はそんなこと、しないんだなあ」

「そうだよ、一体誰がやったのかは、わからないけどそれをボクのせい——というかタヌキ君の仕業だと勘違いして、それで……」

「ああ、それは、大変なんだなあ、ぼ、僕はどうしたらいいんだろう？」

「それなんだよ、タヌキ君、ボク、実はとんでもないことになってしまったんだよ」

「えっ、一体何どうしたんだい？ウサギさん？」

「おばあさんが、ボクをタヌキ汁にしようとしたので、それで必死で抵抗したんだ。そして……」

「えー、ウサギさん怪我でもしたのかい？」

愚鈍なタヌキは心配そうに白いウサギを眺めて、どこかに怪我がないか確かめようとしてしまった。

「ちがうだよ、タヌキ君、ボクはねえ、ボクは、おばあさんと争ううちにおばあさんを……」

白いウサギは目を真っ赤にして涙を浮かべました。

「殺してしまったんだよ」

「ああ、ウサギさん、なんてことを！」

愚鈍なタヌキは大きな声で鳴きました。

「だから、恐ろしくなって……」

白いウサギは身体を小刻みに震わせながら、淡々と語り始めました。

「おばあさんの身体をどこかに隠そうと思って、だけど、おばあさんの身体はボクにはとても運べないので、バラバラにして、埋めてしまおうと思ったんだ。だけど、ボク1人の力ではどうにもならなくなって、それで、恐ろしくなって逃げてきたんだ。」

愚鈍なタヌキはあまりの恐ろしい出来事に、悲しい気持ちはどこかに消え去り、恐ろしさと、そして自責の念に駆られました。

「ぼ、僕がいけないんだなあ。化け術をこんなことに使ってしまった僕がいけないんだなあ」

「タヌキ君、キミは少しも悪くないよ。悪いのはボクさ。だけどボクにはどうしたらいいかわからないんだよ」

なんて愚かな！

なんて愚直な！

なんでキミはそうやって、ボクの言うことをすべて信じるんだい？

狡猾なウサギは、タヌキをだましていう罪の意識は全くありませんでしたが、あまりにも簡単に自分の言うことを信じて、騙されてしまうタヌキのことが、腹立たしくて、腹立たしくて仕方がありませんでした。

「でも、もしかしたらウサギさんがおじいさんとおばあさんに食べられてしまうかも知れなかったんだなあ」

愚鈍なタヌキは、決して未来を予想できないほど愚かではありませんでした。

「もし、そんなことになったら、僕はやっぱり生きていけないんだなあ」

「ともかく、何とかしないと、もうすぐおじいさんが帰ってきてしまう。もし、おばあさんが死んでいることがわかったら、おじいさんだって、きっと悲しさのあまりに死んでしまうかもしれない」

この言葉は決定的でした。

「そんなことは、絶対にダメなんだなあ」

愚鈍なタヌキは、意を決して、おじいさんとおばあさんの家に行くことにしました。

「まずは、おばあさんの身体を運び出さないといけないんだなあ」

愚鈍なタヌキは、バラバラになったおばあさんの身体を、家の近くの草むらに隠そうと思いましたが、おばあさんをそんなところに野ざらしにすることはどうしても忍びなく思えました。

「ああ、どうしよう。おばあさん、ごめんなさい。僕はどうしたらいいんだろう」

愚鈍なタヌキは、どうしていいかわからなくなってしまいました。

「そういえば、聞いたことがある。人間は大切な人を亡くしたときには、その人の死肉を食べるといのがあったなあ」

狡猾なウサギは、いよいよ狡猾でした。

「そうなのかい？ウサギさん、それなら、おじいさんはきっとおばあさんを食べるに違いないね」

愚鈍なタヌキは、いよいよ愚鈍でした。

「人間はどうやってご飯を食べるんだい？」

狡猾なウサギは、ますます狡猾でした。

「畑で取れた野菜や山で取れたものを鍋に入れて煮込んで食べてたよ。僕はその残りを食べさせてもらってたんだ」

愚鈍なタヌキは、ますます愚鈍でした。

「じゃあ、きっとその中におばあさんを入れればいいじゃないかなあ。キミやってみてよ」

狡猾なウサギは、恐ろしく狡猾でした。

「わかったよ、ウサギさん、全部は入らないから、そうだなあ、おばあさんは足が悪かったから、足よりは手だろうね。あとは入らないから、ウサギさん、残りはどうしようか？」

愚鈍なタヌキは、恐ろしく愚鈍でした。

「それなら簡単なことさ！キミが食べればいいよ！」

「そうか！ウサギさん、ボクがおばあさんを食べるよ。大丈夫、後は任せて」

なんと狡猾なことでしょう

なんと愚鈍なことでしょう

愚鈍なタヌキは次から次へとおばあさんの身体をむさぼり食べました。

「おばあさんごめんね、おばあさん、ごめんね」

愚鈍なタヌキ、或いは権汰は、自分を大事にしてくれたおばあさんの死を心から悼み、弔いました。狡猾なウサギはその様子を見て、自分の心がどんどん満たされていくのを感じました。……月が満ちていく……どうしようもなく汚れた月があ……

ウサギの目は、禍々しく真っ赤に輝いていました。愚鈍なタヌキは白いウサギが悲しみに満たされて、目が赤くなっているのだと思いました。おばあさんの身体はあっという間に権汰によって弔われました。残った骨は、狡猾なウサギが家の裏の草むらに隠しました——見つかりやすいように。

最後に残ったのは、おばあさんの腕と、頭でした。

「おばあさんの目、悲しそう？辛そう？苦しそう？」

愚鈍なタヌキはおばあさんが最後に見たもの、感じたものを知りたくなりました。

「大好きなおばあさん、僕はおばあさんのことが大好きだったんだなあ。そうだ、おばあさんの目を食べたら、おばあさんが最後見たものを見る事ができるかもしれないんだなあ」

それは、タヌキの一族が、仲間の死の際、どのような危険な目にあって、死んだのかを、確かめる手段でした。臆病なタヌキたちは、一族の死を無駄にしないように、使者の目玉や耳や鼻を食べることで、その記憶を自らの体験とすることができたのです。

おばあさんの目玉、きれいな目玉、僕に優しく微笑みかけてくれた。どうかおばあさんの見たもの、おばあさんの聞いたものがボクの心に届きますように……

愚鈍なタヌキは見ました。

愚鈍なタヌキは聞きました。

愚鈍なタヌキは、悲しくて、恐ろしくて、そして、何かが壊れました。

「どうしたんだい、タヌキ君？」

おばあさんの頭を平らげた、タヌキはオイオイと鳴き始めました。

「おばあさんのこと、思い出したんだね」

狡猾なウサギは、このときばかりは愚鈍でした。

「う、ウサギさん、僕は、僕は、これでよかったのかなあ」

愚鈍なタヌキは、このときばかりは狡猾でした。

「さあ、あとは、片づけをして、ボクがおばあさんに化けて、ボクらの作った「タヌキ汁」をおじいさんに食べさせてあげるよ」

そういいながら、白いウサギは、心の中で身を震わせていました。

ああ、いいよ、いいよ、すごくいい！

たまらないよ、どんどん満たされていく！

「う、ウサギさん、少し待ってて、ぼ、僕、もう少しお別れをしたいんだなあ。だから、おばあさんに化けて、おじいさんの様子を見てきて欲しいんだなあ。その間にお別れをして、ボクは残りの骨を片付けるよ」

「ああ、いいとも、ちょうどボクもそうしようと思っていたところだ」

そう言うと、白いウサギは、手を前にして化け術の構えをしました。次の瞬間、白いウサギはタヌキの姿に、そして、おばあさんの姿に変わりました。

「じゃあ、あとは任せておくれ。権汰はすぐに、山にお帰り」

おばあさん、或いは白いウサギは、そういい残しておじいさんの畑のほうに向かいました。

「おばあさんの指先、ボクを可愛がってくれたのに……こんなことになってしまって、こんなことになってしまって」

出かけたフリをした白いウサギは、物陰からそっと愚鈍なタヌキを見張っていましたが、ブツブツ言いながら、おばあさんの手を食いちぎりながら、鍋の中に肉の塊を放り込んでいくタヌキの姿をみて、ますます興奮していました。

そうだよ、いいよ、いいね、その肉をおじいさんに食わしてやる。

きっとこれで満たされるんだ。何もかも……

タヌキが、鍋を作り上げたところを見定めると、おばあさん、或いは狂喜のウサギは、おじいさんの畑のほうへ歩いていきました。

「おじいさん、おじいさん」

「おーばあさんが、あー、見てのとおりじゃ、ひどいもんじゃろう」

「まあ、まあ、それでも、全部がダメになったわけじゃないですからね」

「あー、それでえー、あのおイタズラタヌキはどうしてるかのお？」

「あんまり騒ぐんで、さっき、杵で頭を叩いて……もうタヌキ汁になってますよ」

「あーれ、まあ、そうかあ、権汰もタヌキ汁になりおったかあ」

「まあ、まあ、日が暮れるくらいまでには、おいしくできますから、どれか食べられる野菜を少し畑から持って帰ろうと思って」

「あー、なら、あそこに並べてある中から持ってけー、早く食べないと痛んじゃうわ」

「あー、かわいそうだが仕方がねえ」

「んだあ、かわいそうだが仕方がねえ」

そういうとおばあさん或いは狡猾なウサギは、適当な野菜をいくつか手に持って、畑から家に帰っていきました。

「まあ、さすがのばあさんも、権汰のことは諦めたか……」

おじいさんは空を見上げながら、腰を右手のこぶしで叩きながら、そう、つぶやきました。

「クッ、クッ、クッ、クッ……タヌキ汁よりも、もっと、うまいぞ、涙が溢れるほどうまいぞー」

陽は傾き、影は実態よりも少しばかり長く大きくなる時間、それでも陽が暮れるまでは、まだまだ時間があります。

「……うすのろのタヌキはもう山に帰っただろうか？」

家の近くまで来ると愚鈍なタヌキの声がします。

「ウサギさーん」……ちい、のろまが！まだこの辺をうろうろしていたか！

愚鈍なタヌキがおばあさんをウサギと呼んだので、おばあさんは白いウサギになりました。

「ウサギさん、本当に、これでよかったのかなあ」

愚鈍なタヌキはとても、とても悲しそうな顔をしていました。

「キミが悲しむのはわかるよ。でも、キミがそんなに悲しい顔をする、ボクまで悲しくなってしまう。そうだね。じゃあ、こうしよう、ボクは自らの身体を炎で焼き、おじいさんに食べても

らうよ。遠い遠い国のボクの祖先は火の中に自ら飛び込み、その身を神に捧げることであの月に住むことができるようになったと聞いたことがある。キミのようにおばあさんを食べて供養をすることはできないから、ボクはせめて、この身をおじいさんに捧げることにしよう」

そういうと、白い兎はおじいさんの家に入り、自らの身体を釜の中に入れようとしてしまった。「ウサギさん、ダメなんだなあ、そんなことをしたら、僕、また一人ぼっちになっちゃうんだなあ」

愚鈍なタヌキは必死でそれを止めました。

「熱い！」

釜戸と兎の間に無理やり入ったタヌキの背中は、炎で焼け爛れてしまいました。それを見た狡猾なウサギは、愚鈍なタヌキを今すぐ釜で焼き殺してやりたいという衝動に駆られました。

「ああ、タヌキ君！なんてことを！大丈夫かい！」

愚鈍なタヌキは顔をこわばらせながらいいました。

「ウサギさん、お願いだから、もう、僕を悲しませないで欲しいんだなあ」

そう言ってウサギを家の外まで連れ出しました。

「ああ、ウサギさん、どうか僕を悲しませないで欲しいんだなあ」

「……身を捧げて月になるかあ」

白いウサギは、古くから言い伝えられている逸話を思い出していました。

三獣、菩薩の道を修行し、兎が身を焼く語

それは今昔物語に書かれた遠い遠い昔のお話。

今は昔、天竺において、兎・狐・猿の三匹の獣が菩薩の道を修行していました。

三匹はいつも仲良く暮らしていましたが、「自分たちは前世で犯した罪・障が重くて、いやしい獣の身に生まれた。これは前世で生物をあわれまず、財物を惜しんで人に与えないなどの罪が深かったために、地獄に堕ちて苦しみを受け、それでもなお報いが足りず、残りの報いとしてこのような身に生まれたのだ」といつも話し合っていました。

「されば、今生こそ我が身を捨てて善業を重ねよう」

三匹はそのように考え自分のことは顧みず、ひたすら他の者のために尽くそうと心がけるようになりました。

帝釈天は彼等の行いをご覧になり、「彼等は獣の身でありながら、珍しく殊勝な心がけである。人間の身に生まれた者でも、生き物を殺し、人の財を奪い、父母を殺し、兄弟を仇敵のように思い、笑顔の裏に悪心を隠し、思慕の姿に怒りの心を秘めているものだ」と感心しました。

「ましてこのような獣は、まことの信心が深いとは思いがたい」

ひとつ試してみよう——そう思った帝釈天は、たちまち老翁に姿を変え、力なく、疲れてよぼよぼの姿となって、三匹の獣のいるところに現れました。

「わしは年老い疲れ果ててどうにもならぬ。お前たち三匹でわしを養って下され。わしには子供もなく、家も貧しくて食物もない。聞けば、お前たち三匹は情深いとのことだ」

三匹の獣は、これを聞くと、

「それこそ私たちの本来の志です。さっそく養ってあげましょう」と言いました。

猿は木に登って、栗・柿・梨などを取って来て好きな物を食べさせました。狐は墓小屋に行って、人が供えた餅やませ飯、鮑や鰹などさまざまの魚類をくすねて来ては、おなか一杯に食べさせました。

こうして数日が過ぎ、老人は、「お前たち二匹は実に慈悲深い。これはもう菩薩といってよい」と誉めました。

これを開いた兎は一所懸命になって、東西南北を求め歩きましたが、なに一つ求め得たものはありませんでした。

兎は考えました。

「自分はその老人を養おうと思って野山を歩いたが、野山は恐ろしくてならない。人間に殺されたり、獣に喰われたりして、不本意にも空しく命を失ってしまうのが関の山だ。いっそのこと今この身を捨てて、あの老人に食べてもらって、永久に生死輪廻の世界を離脱することにしよう」

そう考えた兎は、老人のところに行って言いました。

「私はこれから出かけて、おいしい物を求めて参ります。木を拾って火をたいて待っていて下さい」

そこで、猿は木を拾い、狐は火を取って来てたきつけて「ひよっとすると兎は何かおいしいご馳走を持って来るかもしれない」と思って待っていると、なんと兎は手ぶらで帰って来ました。

猿と狐はそれを見て、「お前は何かを持って来たというのか。思っていたとおりだ。うそをついて人をだまし、木を拾わせ、火をたかせて、それでお前があたたまろうというのだろう。憎らしい」と兎を責め立てました。

すると、兎は、「私には食物を求めて来る力がありません。ですから、どうぞ私の身体を焼いて食べて下さい」と言うなり、火の中に飛び込んで焼け死んでしまいました。

それを見ていた帝釈天はもとの姿に戻り、この兎が火の中に飛び込んだ姿を月の中に移し、あまねく一切の衆生に見せるために、月の中にとどめ置かれました。

「されば、月の表面に雲のようなものがあるのは、この兎が火に焼けた煙である。また、月の中に兎がいるというのは、この兎の姿である。誰も皆、月を見るたびに、この兎のことを思い浮べるがよい。」

「今昔物語 天竺部 卷第五 第十三」

三獣、菩薩の道を修行し、兎が身を焼く語

断ち切れぬ思い

古い話さ、それに――それにボクには関係のない話さ
白兎はこの話が嫌いでした。

まるで兎は役立たずだから、人間や獣の餌くらいにしか役に立たないと言っている様なものじゃないか！

……だからボクは……だからボクは、誰よりも早く走り、誰よりもすばしっこく動き、用心深く生きてきた。それなのに――それなのにこともあろうに亀に競争で負けるなんて！しかも――しかもタヌキに出し抜かれるなんて！

「ボクは何をしてるんだろう」
不意に白兎がつぶやきました。

「ウサギさんしっかりして欲しいんだなあ」
愚鈍なタヌキは鳴きそうな目で白い兎を見つめています。

「あ、ああ、大丈夫、もう、大丈夫だから」
白いウサギは体中の毛が逆立つのを感じました。

ボクは怒っているのか？
それとも怯えているのか？
それとも悦になっているのか？

そのどれもがそうであり、また、どれもがそれだけではありませんでした。
「タヌキ君、キミは早く行ったほうがいい。後はボクがやるから。ちゃんとやるから……」
そういうと白いウサギは化け術を使いおばあさんの姿になりました。

「ウサギさん。これでよかったのかなあ。僕にはウサギさんが……」
愚鈍なタヌキは珍しく言葉を詰まらせました。白いウサギは、タヌキが何を言おうとしているのか、まったく気にしていませんでした。

大丈夫。ちゃんとやるさ。ちゃんと片付けてやる。
これで終わりさ、全て終わりさ、いや、そうじゃない、まだ続く
もっと、もっと……

「じゃあ、もうおじいさんが帰ってくるかもしれないから」

そう言うとおばあさん或いは狡猾なウサギは、おじいさんの畑から持ってきた野菜をおばあさんの腕の肉が入った鍋に入れていきました。

鍋をかき回すおばあさんの目は、笑っているような、怒っているような、寂しいような、うれしいような、そして悲しいような表情を浮かべていましたが、愚鈍なタヌキにはそれが、どのように見えようともいたたまれない思いに変わりはありませんでした。

……ウサギさん、僕には、僕には君が……

愚鈍なタヌキは思いを断ち切るようにおばあさん或いは白いウサギに背を向けて家を出て行きました。

やがて日は暮れ、おじいさんが畑仕事から帰ってきました。恐ろしい晚餐が始まろうとします。

月は昇り、闇を照らす——あるいは禍々しい月が闇を呼び込んだのでしょうか？

「ばあさん、やっぱり、獣を入れると臭いがきついとう」

日が暮れ、おじいさんが畑から帰ってきました。夏だというのに、心なしか家の中が冷たく感じましたが、それは自分が疲れているせいか、権汰がないせいだとおじいさんは思いました。

「今日はいっぱい動いたからのおー、もう腹が減って、腹が減ってのお。どうじゃい、タヌキ汁のほうは？」

おじいさんは畑から採って来た野菜を入れたかごを背中から下ろしながら、庵の前でぽつんと座っているおばあさんに話しかけました。

「まあまあ、今日は、本当にご苦労様です。おじいさん、もう『タヌキ汁』は出来上がってますよ」

そういと、おばあさんは庵の火に掛かっている鍋のフタを取り、鍋の中をかき混ぜ始めました。

「おー、おー、いい匂いじゃのお、まあ、権汰にはかわいそうなことをしたかもしれんが、仕方がないのう」

「そうすね。まあ、まあ、早くおあがりなさいなあ。おじいさん」

そういっておばあさんはおじいさんを庵の前に招き入れました。

「はい、これ、どうぞ。おいしい御肉がたっぷり入ってますから、精が出ますよ」

「あー、そうじゃなあ、どれ、ばあさんも一緒に喰うかね？」

「あー、私はほら、どうもねえ、今はまだ、食欲がねえ」

「そーだなあ、あー、そーだなあ、ばあさんは、権汰のことは本当に可愛がってたものなあ」

「でも、こうしておじいさんに食べてもらえれば、権汰も幸せでしょう」

おばあさんはニコニコしながらおじいさんに言いました。

「あー、ちがいない、ちがいない」

そういって、おじいさんは、お椀によそられたおばあさんを一口食べました。

「おやあ、ばあさん、タヌキ汁は、こんな感じだったかのお？」

「いやですよ、おじいさん、やっぱり権汰のことが気になるんですかね」

「あー、まあ、そりゃそうじゃが・・・」

そういいながら、おじいさんはついに、おばあさんのよそったお椀の中身を全部平らげました

「うーん、なんか、こーう、胸につかえるなあ。ばあさん」

しかし、おばあさんはニコニコしながらおじいさんを見つめるだけで返事をしません。

「のおー、ばあさん、これは、そのー、タヌキ汁かのお」

おじいさんはどうにも、胸が苦しくなってきました。

「あー、どうしたことじゃ、なんで、こんなに胸が苦しいんじゃ」

おじいさんは胸の辺りを右手でかきむしりながら、おばあさんに言いました。

「ばあさん、ばあさんやあ」

するとようやく、おばあさんが口を開きました。

シューっ！

開いたおばあさんの口は、恐ろしいほど赤く染まり、そこからあふれ出すように瘴気が噴出しました。

「喰った、喰ったね、喰いおった！」

おばあさんの口は大きく釣りあがり、目はおぞましいほどに禍々しく真っ赤に染まっています。

「おー、おー、ばあさん、これは、いったい、いったい何を食わせたんだい？」

おじいさんは気分の悪さに、先ほど食べたものを吐き出しそうになりましたが、それもできません。食べたものがおじいさんの喉や、食道や胃にまとわりついて、暴れているようでした。

「こ、こ、これは・・・」

おじいさんは声もまともに出せなくなってきました。

「聞きたいかえ？聞きたいかえ？聞きたいかえのおー」

おばあさんの口からあふれ出た瘴気は、もはや家中に充満し、息が苦しくなるほどでした。

「お前さんが口に入れたのはなあ、お前さんが噛み砕いたのはなあ、お前さんがすすったのわなあ、お前さんが飲み込んだのはなあ」

「あ、あ、あ、あ、あ、あ、」

おじいさんは恐ろしさのあまり声が出ません。

「これじゃよ！」

そういっておばあさんが鍋の中から取り出したのは、おばあさんの右手の骨でした。

「あな、おそろしや！」

おばあさんはその場にうずくまり、四つんばいになっておじいさんに向かって吼えました。

「そらみたことか！ 獣に情をかけ、獣をつなぎ、獣を食おうとした、これが罰じゃ！」

おばあさんはそういうと、タヌキの姿、凶暴な獣の姿に変わっていきました。

喪失

おじいさんはあまりに出来事に言葉を失いかけてました。

「あ、あ、あ、あ、」

おじいさんは自分が食べたものを吐き出そうと、指をのどまで入れようとしたのですが、体が思うように動きません、手は強張り、指が開きません。食べたものを吐き出そうとするあまりに、そのうちに息がうまくできなくなりました。

「かあ、かあ、かあ、くわあ、くわあ・・・」

おじいさんの視界はどんどん狭くなっていきます。タヌキの姿がどんどん闇に解けていきます。やがて、おじいさんは視界を失いました。おじいさんはその場に倒れこみ、気を失ってしまいました。

「クッ、クッ、クッ、クウウウ」

静寂の闇の中に獣の悦に浸る奇声が響きます。

「クウワァ、クウワァ、クウワァ、カァ！」

それは悦でもあり、鬱でもあり、歓喜でもあり、悲哀であり、いふなれば狂気、そして狂喜。

狂喜の獣――目は爛々と赤く輝き、耳はすべての凶事を聞き分けようと禍々しくとがり、体はまるで闇夜に輝く月明かりのごとく白く輝き、その姿はこの世のどんな生き物よりも美しく、そしてどんな命よりも無機質で、魂の偉大さと自然の摂理とはまるで無縁の存在。

「ボクがどれだけ禍々しく、猛々しい獣になろうとしても、ボクには獲物の喉に噛み付く牙も、皮を引き裂くツメもない。なぜならボクはウサギなんだ。」

ウサギは自分のなくしたものを取り戻そうと、ウサギ以上の存在になろうとしました。どんなに化けても、どんなに狂って見ても、やはりウサギはウサギ。

「自分は生きている限り、ウサギでしかない」

ウサギの目からは涙が流れ出しました。

あまりに目が赤かったので、それはまるで、血が滴るようでした。

「ああ、だからあなたはその身をささげ、ウサギ以外のものになって、肉の塊となって、代わろうとしたのですか？」

ウサギの見上げた夜空には、一匹のウサギがつきの中で、狂おうしくも美しく輝き、飛び跳ねていました。

「でも、あなたは天に召されても、やはりウサギのままですら。それはすなわち、ウサ

ギはどんなに清くあろうとも、どんなに悪であろうとも、清いウサギか悪いウサギにしかねないということなのですか？」

「シュユユューウ」

ウサギの口元からどす黒い瘴気がこぼれ落ちました。

「例え狸の力を利用し、何かに化けたとしても、それは所詮、化けたウサギ、タヌキの力を借りたウサギなのですか？」

「キュユユューウ」

どんなに大きな声で鳴こうとも、ウサギの声はウサギにしか聞こえませんが、ウサギの耳は大きいので、それはまるでウサギ周りすべての世界に響いているかのように聞こえるのです。

「ボクの声は届かない、誰の耳にも、誰の心にも・・・」

ウサギの心にはいつの間にかあの愚鈍なタヌキの姿が映し出されました。

「お前は、お前は、ボクを苦しめるために生まれてきたのか！」

ウサギは高く、高く飛び上がりました。月に届くはずもなく、何かが見えるわけもなく、それでもウサギは跳ねました。

うさぎうさぎ

何見て跳ねる

うさぎうさぎ

何見て跳ねる

うさぎはうさぎ

うさぎはうさぎ

赤い月に泣き崩れる

ウサギが出て行った後、おじいさんはしばらく気を失っていましたが、翌朝、ようやく目を覚ましました。

おじいさんは、昨日起きたことを思い出すと、必死で指を喉に入れて食べたものを吐き出そうとしました。

「あ、あ、あ、ああああ」

おじいさんはあまりの苦しさに、涙があふれ出しました。

「あ、あ、あ、あ、あ？」

おじいさんは驚きました。

「あー、あー、うあああー」

おじいさんは言葉を失っていたのです。

……なんてことじゃ、なんて恐ろしいことじゃ、ああ、ばあさんやあ、ばああさんやあ

おじいさんはふらふらと家を出て、あたりを歩き回りました。すると茂みの中に、おばあさんの骨が捨ててありました。

「なあああ、もおああああ」

おじいさんはその場に泣き崩れてしまいました。おじいさんはしばらく泣いて、泣いて、涙が出なくなるほど泣いた後、おばあさんの骨を丁寧に布に拾い集め、家の近くに埋めることにしました。

……ばあさんやあ、苦しかったかえ？痛かったかえ？辛かったかえ？

おじいさんがおばあさんのお墓をつくり、手を合わす頃には、日はもう西に傾きかけていました。

……なんでこんなことになったんじやろう、なんで、ばあさんが死ななあならんかったんか？

おじいさんはおばあさんを失い、言葉を失い、これからどうしていいかわからなくなっていました。

ワシも、もう、生きていても何もいいことなんかない……もういい、ワシもすぐに、ばあさんのところに行かしてくんろう

おじいさんはおばあさんの墓に手を合わせると、家に戻り、身支度をして山のほう歩いていきました。

……ばあさん、ばあさん、すぐにいくからよ、待っておくれ
おじいさんは山道を外れ、林の奥まで入っていきます。

……あー、このへんでいいかのお

おじいさんは大きな杉の木の前で立ち止まりました。おじいさんは懐から縄を取り出すと、杉の木の太い枝に向かって放り投げました。おじいさんは、縄を貼り、そしておばあさんとところへ行こうとしました。

「じいさん、じいさんや」

そのときでした、山の奥のほうからおばあさんの声がするではありませんか。

「しいさん、じいさんや」

「あああああああ、ばあああああ」

おじいさんは声にならない声をあげ、おばあさんの姿を探しました。

「じいさんや、こっち、こっち」

「あー、あー、あー」

おじいさんは我を忘れて、おばあさんの声がするほうへ歩いていきます。

……ばあさん、どこじゃ、どこにおるんじゃ、迎えに来てくれたのかええ？

おじいさんは無我夢中でおばあさんの声のするほうに歩いていきました。やがて、近くにおばあさんの気配を感じたおじいさんは、足早に気配のするほうに向かいました。

「あー、おー、うおーん」

おじいさんは泣き崩れました。

おじいさんの目の前にあったのは、おじいさんが山に入ったり出たりするときに拝んでいた御地蔵様でした。

……ばあさん、ワシはまだ、そっちに行っては行けないのかのあ

日は暮れ、あたりはすっかり暗くなり、真っ赤に染まった丸い月が、東の空からおじいさんを見つめていました。

それぞれの願い

おばあさんを亡くし、自らの言葉も失ったおじいさんは、毎日畑を耕しながら、おばあさんのお墓に手を合わせていました。

ばあさん、これからどうすればいいかのお。
言葉を亡くしてもちっとも不自由じゃないんじゃよ。
だって、言葉が話せても、話す相手がおらんからのお。

おばあさんのことを思えば思うほど、おじいさんはおばあさんの命を奪った権汰を、あの化けダヌキを許すことができませんでした。

どうにかして、あの化けダヌキを懲らしめることはできないかのお。

おじいさんは時々山の入り口の御地藏様のところに行って、山の神様に願い事をしました。

山の神様、どうか、あの化けダヌキに天罰を、どうか、あの化けダヌキに天罰を。

おじいさんは権汰を捕まえようと、畑の周りや権汰が通りそうな場所に罾をたくさん仕掛けました。その様子を見ていた狡猾なウサギは、愚鈍なタヌキに言いました。

「タヌキくん、困ったことになったよ。おじいさんは君を必死で捕まえようと罾をたくさん仕掛けている。これではとても畑には近づけない。ボクは何も食べる事ができないよ」

愚鈍なタヌキはしばらく考えてからこう言いました。

「おじいさん、かわいそうなんだな。でも、うさぎさんが何も食べられないのは、もっとかわいそうなんだな」

「でも、仕方がないさ。これ以上おじいさんには迷惑はかけられないし、ボクはここを出て行くしかないようだ」

狡猾なウサギは、時に悲しそうに、時に寂しそうに、時に怯えながら愚鈍なタヌキに言いました。

「ウサギさん、何も心配は要らないんだなあ。ウサギさんがここから出て行く必要も、おじいさんが困ることもないんだなあ」

愚鈍なタヌキは、時に悲しそうに、時に寂しそうに、時にやさしく白いウサギに言いました。
愛しいウサギに言いました。
狡猾なウサギに言いました。

「ボクがなんとかするんだなあ」

こいつ、どうするつもりなんだ？

まさか自ら罠に掛かり、その身を捧げようというのか？

いいぞ、それでいい、それでこそ愚鈍なタヌキ。

どこまでも、どこまでも愚かで、鈍くて、のろまで。

お人よしの……貴様はどうしてそこまでお人よしなんだ！

白いウサギはだんだん許せなくなりました。でも、ウサギには何が許せないのか、よくわからなかったのです。

愚鈍なタヌキが許せないのか？

愚かなことが許せないのか？

鈍いことが許せないのか？

お人よしが憎いのか？

それとも、そう思う自分の醜さが許せないのか？

醜さが許せないのか？

自分なのか？

愚鈍な狸は、白いウサギのことをしばらく見つめていました。

ウサギさん、どうか、どうか幸せに、これが最後のボクの願い。

おじさんと仲良く暮らして欲しいんだな。

ボクがするから。

ボクがするから。

だから、お願い、もう悲しいことはしないで。

白いウサギは、愚鈍なタヌキがあまりに美しい澄んだ目でウサギを見つめるので、思わず見とれてしまいました。

「ウサギさん、僕にいい考えがあるんだなあ、だから、だから僕について来て欲しいんだな」

「え、いったいどうしたんだい？タヌキ君」

突然のタヌキの申し出に、さすがの狡猾なウサギも虚を衝かれました。

「僕について来て欲しいんだな、僕はのろまだから、僕を追い越しちゃだめだよ」

そういうと愚鈍なタヌキは一気に明かりの灯るおじさんの家に向かって走り出しました。

ドーン！

おじいさんが囲炉裏を前にくつろいでいると、突然家の扉に何か激突しました。
……なんじゃい、だれぞか来たかえ？

おじいさんが恐る恐る扉を開けると、黒い塊が扉の隙間をすり抜けて家の中に入ってきました。

「お、お、おおお」

その黒い塊は土間から家の中に上がりこみ、囲炉裏の前で立ち止まりました。

「ああああ、ああああ……」

おじいさんの目の前に現れたのはあの権汰でした。

「があああ、ぐあああ……」

おじいさんは声にならない声を上げながら、権汰を睨みつけながら、近くにあった扉のつかえ棒を取りました。するとその時です。不意に外から白い影が家の中に入ってきました。

……滅茶苦茶しやがる！こいつ！いったい何をしようというんだ！

白いウサギも土間から家の中に上がり、二匹の獣はおじいさんの囲炉裏の前で対峙しました。

……おじいさん、うさぎさん、ごめんなさい。みんな僕がいけないんだなあ。

権汰は悲しい目で、おじいさんを見つめ、愚鈍な狸は愛しい人の姿を忘れないように心に刻もうと白いウサギを見つめました。

……権汰、お前は？

おじいさんは驚きました。

……タヌキ！貴様！

狡猾なウサギは慄きました。

……やめてけろ！

おじいさんは心の中で叫びました。

……何をしようというんだ！貴様！

狡猾なウサギは心の中で咆哮しました。

ですが声は出せません。

ですが声は届きません。

けれど、思いは伝わりました。

……おじいさん、さようなら、ウサギさん、ウサギさん、どうか、どうか許して欲しいんだな。

権汰は、愚鈍なタヌキは、囲炉裏の中に飛び込むと、人の丈ほどの火柱が上がり、権汰を、愚鈍なタヌキを一瞬のうちに丸焦げにしてみました。

「権汰あああ！」

おじいさんは叫びました。

「キューウウウ」

白いウサギは、声を絞り出しました。

……貴様、なんてことを！なんて愚かなんだ！なんて鈍いんだ！オレがそんなことを望んでいたと思うのか！

白いウサギの心の中で、何かがはじけました。

カチカチ、カチカチ、カチカチ

白いウサギの念珠が音を立て始めました。

カチカチ、カチカチ、カチカチ

カチカチ、カチカチ、カチカチ

解き放たれた兎

不思議なことに、狸を覆った炎は、家の中の何者も燃やすことなく、あっという間に小さな炎になり、やがて消えてしまいました。そしてそこには黒く焼けただれた肉の塊が、うっすらと白い煙を上げながら、横たわっていました。

カチカチカチ
カチカチカチ
カチカチカチ

白いウサギの念珠は音を立てながら小刻みに震えながら音を立てています。その振幅はだんだん大きくなり、カチカチという音も次第に大きくなります。

「こ、これはどうしたことじゃ」

おじいさんは、そういうと、自分の発した声に驚きました。

「おー、声が、声もどった」

白いウサギは、何がなんだか分からないまま、おじいさんの方に身体を向けました。

「おー、白いウサギ、本当に山の神様の使いなのかのおー」

おじいさんが手を合わせて白いウサギを拝むと、カチカチと言う音が止まりました。

「おー、どうしたんじゃ」

パチパチ！パチパチ！パシャーン！

次の瞬間、白いウサギを縛り付けていた念珠はその場で砕け、四方八方に飛び散りました。白いウサギはあまりの出来事に身を飛び上がらせました。その姿はおじいさんには美しく華麗でこの世のものとは思えない光景でした。

「おー、そうか、やはり山の神様はワシの願いを聞いてくださったのかのあ」

「ちげーねえー、ちげーねえー、ありがたや、ありがたや」

……じじい！ちがうぞ！ちがうぞ！オレはそんなんじゃねー、そんなもんじゃねーんだよ！

白いウサギは、愚鈍な狸の呪縛から解き放たれ、念珠の呪縛から解き放たれたばかりだというのに、あらたな『思い』がウサギを縛り付けることになってしまいました。

……じじい！やめろ！やめてくれ！これ以上オレを苦しめないでくれ！

……もう……オレを、オレを……放っておいてくれ！

月になった狸

おじいさんは黒焦げになった権汰の亡骸をおばあさんの畑のそばに埋めることにしました。

「あの最後の目は、あれは権汰の目じゃったのに、なんでじゃろーなあ」

白いウサギは、おじいさんのすぐそばで、埋められていく愚鈍な狸を見つめていました。

「何かに取り憑かれておったのかのお、それをお前さんが追い出してくれたのかのお」

……ちがう、ちがうぞジジイ！なんで、貴様もそんなふうにおレを信じるんだ。おレは……おレはそんなんじゃない！

嗚呼、おレはこんな風にしか生きられないのか……おレは、おレは……

白いウサギはやりきれない気持ちの中、夜空を見上げました。そこには、まばゆいばかりの星たちと、少しかけてしまった月が浮かんでいます。

「……おレの月はいつも欠けている。お前、いつからそこにいたんだよ、そこはボクの場所じゃないか」

白いウサギの目には、月の影が兎ではなく、愚鈍なタヌキが黒焦げになって横たわった姿に見えました。

「結局お前は、おレを苦しめるだけ苦しめて自分はまんまとおレ様の場所を奪いやがった……おレは、またしても、してやられたって訳か。

クッウ、クックツ、クツ、クウツ

クッウ、クックツ、クツ、クウツ

カァツ、カツカツ、カツ、カァツ

「キュー、キュー」

「そうかい、お前も悲しいかえ、ワシも寂しい、何もかも亡くしてしまった」

おじいさんはそういいながら、白い兎の頭を撫でました。

「お前さえよければ、ずっとここにいてもええよ、そうさな、それがいい」

おじいさんは優しい声で言いました。

「ワシもそう長くは生きるつもりもないが、ばあさんがまだ、いっちゃいかんと言うんでなあ」

こうして白い兎は、里を追いやられ、月を追いやられて、おじいさんと一緒に暮らすことになりました。

ここでの生活は、オレの望んでいたもの。

なんの心配もない。

なんの恐れもない。

今朝も、おじいさんは畑に出かけていきます。おじいさんは一生懸命に畑を耕し、朝から晩まで働きました。おじいさんと、一匹のウサギが暮らしていくには十分な量の作物が取れ、二人は仲良く暮らしました。

でも、なんでなんだよ。

なんで、こんなに気持ちが悪い。

なんで、こんなに居心地が悪い。

おじいさんは白いウサギに名前は付けませんでした。ただ、時々ウサギの身体を撫でたり、その日にあったことを話して聞かせたりはしましたが、縄につなぐこともしなければ、家に閉じ込めることもせず、ウサギが自由に出入りできるようにしていました。

「爺さん、オレはあんたのばあさんを殺したんだぞ！」

おじいさんは、おばあさんや権汰がいた時ほど笑いませんでしたが、おばあさんや権汰がいなくなった時ほど悲しい顔をしなくなりました。

「爺さん、オレは権汰を追い詰めて、黒焦げにってしまったんだぞ！」

おじいさんは、時々月を見上げると、権汰の話をしました。おばあさんの話をしました。

「なんでオレにそんなにやさしいんだ？」

おじいさんは、白いウサギを大事にしました。

「なんで、オレの話をそんな目で見ると？」

おじいさんは、白いウサギは山の神の使いだと思い込んでいました。

「なんで、オレは満たされない？」

おじいさんには、白いウサギの心の内等、わかるはずもありませんでした。

なにもかも、なにもかも壊してしまおう。

どうせ、このままここで暮らしても、オレの心は満たされない。

どうせ、このままここで暮らしても、オレの居場所はここにはない。

爺さんの心には、ばあさんと権汰がいる――そして、月にはヤツの亡骸がある。

白いウサギは、平穩の中にある狂気を拾い集めて、新たな狂喜を求め始めました。

「爺さんには恨みはないが、この際それは関係ない」

おばあさんと権汰が死んで、2度目の満月の夜、おじいさんが眠りにつき、あたりを静寂が包むなか、白いウサギは狡猾なウサギとなり、次第に禍々しい瘴気を放ち始めました。

「なにもかも壊して、それで終わりにしよう」

土間においてある臼の横に、おばあさんを撲殺した杵が置いてあります。

「こいつで、爺もばあさんのところに送ってやる」

凶暴な獣から漂う瘴気は、おじいさんの身体を包み始めました。

「さあ、ばあさんの所に行くんだなあ」

凶暴な獣が杵を振り上げたとき、ウサギの首を2本の腕が締め上げました。

「くっ、くっ、苦しい、じじい！目を覚ましたかあ！」

凶暴な獣は、急に首を絞められたので、一瞬目の前が真っ暗になり、視界を失いました。

「ちっ、畜生、殺してやる！」

凶暴な獣は、恐ろしいほどの執念で、おじいさんを殴り殺そうと狙いをおじいさんの頭に見定めた瞬間。

「な、なんだと……こ、これは……これは……」

横になっていたおじいさんは白目をむいて天井を見上げています。

凶暴な獣の首を絞めていたもの。

それは、おじいさんの口から這い出した人間の腕。

「こ、これは、ばあさんの……ばあさんの腕……」

それは、愚鈍のタヌキが施した呪詛。

おじいさんの身を守るために、おばあさんの腕に呪詛の術を施し、万が一のことに備えたものでした。

「タ、タヌキか、あのタヌキが……」

薄れていく意識の中、狡猾なウサギの脳裏に、愚鈍なタヌキの最後の姿が浮かび上がりました。

「――あの目は、そうか、あの目はすべてお見通しだったって訳だ」

これでいい。なにもかも。所詮オレはただの兎だ。

「さあ、オレを喰え」

白いウサギは、静かに目を閉じ、全てに身をゆだねました。おじいさんの口から這い出したおばあさんの腕は、そのまま白いウサギをおじいさんの口の中に引きずり込みます。

「嗚呼！この身を捧げれば、オレはまた、あの場所に帰れるのか……」

ウサギの姿は跡形もなく消え、おじいさんの口の周りに、白い毛が残りましたが、やがておじいさんの寝息が静かに毛を飛ばし、何事もなかったかのように、静かな満月の夜は更けていきます。

月の明かりは闇夜を照らし

時に心を惑わし

時に心を震わせ

時に心を揺さぶり

時に心を乱れさせ

時に心を安らかにし

時に心を狂わせ

時に心を奪います

愚鈍なタヌキは月に焦がれ

狡猾なウサギもまた月に焦がれ

愚鈍なタヌキは愚鈍ゆえ、そしてタヌキゆえ

狡猾なウサギは狡猾ゆえ、そしてウサギゆえ

タヌキが白いウサギの中に見た月は、どんな月だったのか？

ウサギが愚直なタヌキの中に見た月は、どんな月だったのか？

月の光に翻弄されたタヌキとウサギのお話。

これにて終幕。